7451
計 8
365
220
457

粋客に嬉れしい遊藝の新版御披露

遊藝新の大流行

本書發行日尚淺シト雖ドモ非常之好評ヲ以テ數千部ノ製本ヲ賣盡シタレバ今般更ニ五千部ヲ增刷シ

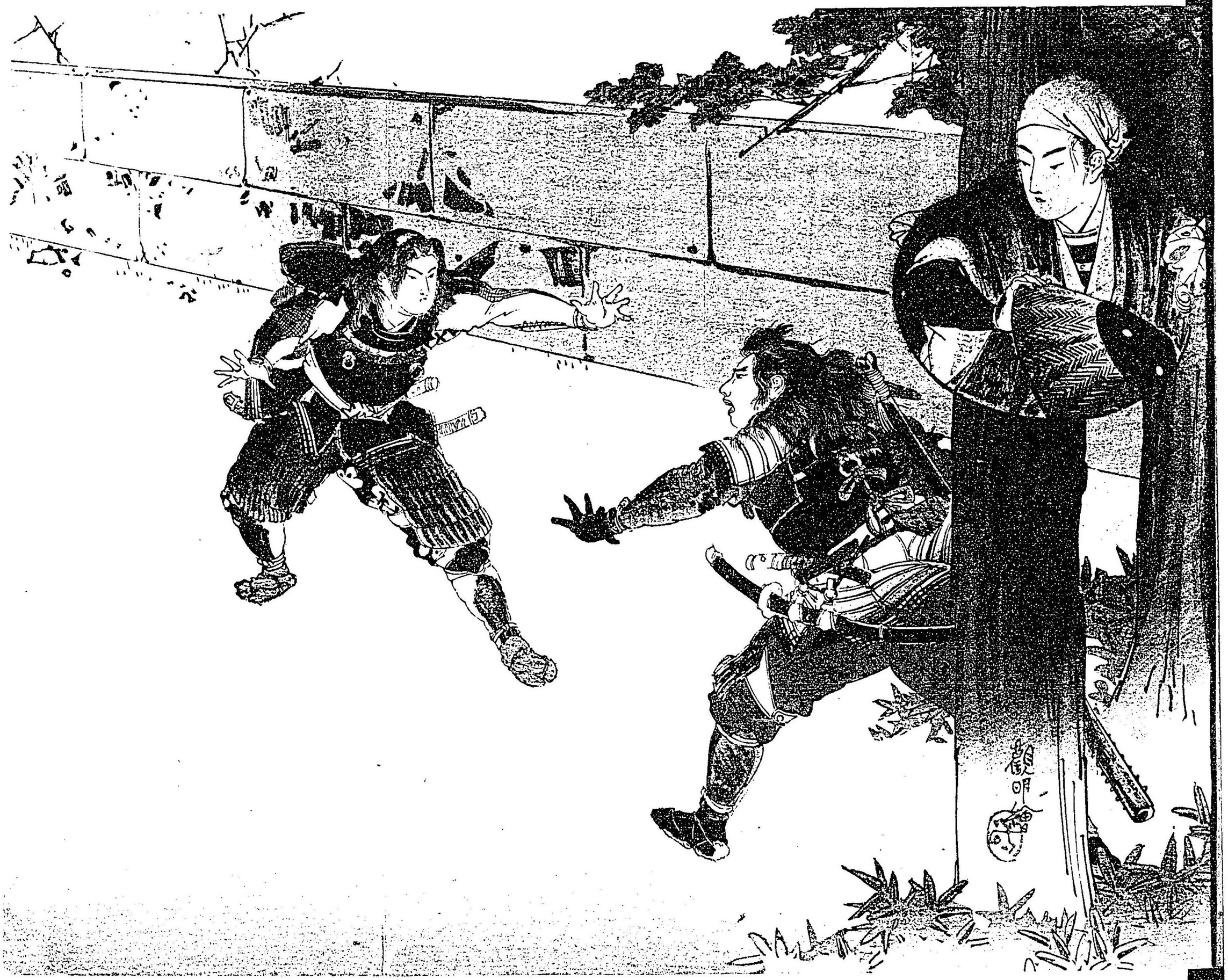
大當り就として特別正價金廿貳錢

郵稅六錢　郵券代用一割增

四六版形　極彩色美人口畫入　休裁頗美々敷製本　紙質上質　紙員三百五十頁

本書略目◎大阪で有名なる落語家幷に藝妓の新作最新花柳流行新歌◎外人失戀お雪ともルガン流行歌◎雪中行軍凍死の流行歌◎最新流行何だ〳〵ヨ節◎圓若十八番の改良注意節◎やりさび◎隅田川新磯ぶし◎其他落語家新作◎新吉原節◎博多節◎有難ぶし◎申上ます◎何だい法界◎さのさ節◎東雲ぶし◎雨の降るのに◎あきれるモー◎木更津甚句◎四季ぶし◎おつだね◎新博多◎石川屋◎びよこびよこ◎べんかいな◎しんから節◎トコサイ〳〵◎新ぢん節◎レールエ節◎粧のよさ節◎名所ぶし◎ひや〳〵節◎ノーエ節◎アノチソカチ◎落語節◎壯士の新作活潑なる愉快節◎相撲甚句◎名古屋ぢんく◎大津繪◎伊勢節◎とつちりとん◎追分◎琉球ぶし◎出雲節◎新作二上り新内◎浮世節◎海あんじ◎緣かいな◎古今有名なる宗匠幷に藝妓の新作都々逸◎意氣な端唄◎座敷さわぎ歌◎御座敷小うた◎意氣天狗新作の毬歌◎清元◎江戸歌◎地歌◎新內◎源氏節◎佐和里◎潛稽上るり◎やんれぶし◎酒席座敷遊藝◎壯士萬歲◎二輪加◎劍舞◎劍舞吟詩◎落はなし◎一トロはなし◎あはだん經◎芝居の物まね◎謎かけ◎考物◎輕口問答◎地口合◎座敷手品◎座敷奇術◎遊◎拳の打方圖入◎西洋骨牌使ひ方◎八々の秘法等其外數百種の流行歌幷に遊藝等を澤山集めたる實に愉快を極むる粹本なれば一本購求して其味を知りたまへ

發行所　大阪市南區心齋橋南詰東入　名倉昭文館



1758
365

豪傑加藤虎之助

二代目 淺川富士丸講演
西尾一山後見
吉田松茵速記

明治
37 4 5
交内

第一席

エ、本日より口演致しますのは、彼の朕ヶ嶽の七本槍に其の武勇を轟かし、又朝鮮征伐に先鋒と相成つて、鬼上官と綽名を取りまして、遂に従五位侍従七十餘萬石肥後熊本の城主と相成りました加藤清正が一代の履歴でございます、固より此の人の一代は記に太閤記の中に出てございますが、生立一條より詳しく

伺ひました口演速記本はございませんので、就ては此の度愛讀諸君より完全致したる加藤清正の事歴を口演致して呉れよとの御依頼でございますに依り、充分に取調べましたる上、之れより言上仕る事に致します、隨分世間には如何はしき事實相違の事を申しあげる者もございますが、何にを言ひましても豐太閤の隨一の家來に致して、清正公大神と齋祀られる御方でございます、殊に法華宗のお方は此の加藤清正の事は詳しくお取調べに爲つて居る相でございますから、年代等は特に注意を致しまして、只今まで同業者が申しあげる所と少々違ふた所もございますから、先づ〳〵夫れをお樂みに御清聽、否御高覽の程を偏に願ひ上げ奉ります、長口上は御退屈の基、早速取懸る事に仕ります

さて此の加藤清正公の御先祖を尋ねますると云ふと、大職冠藤原鎌足公の子孫でございまして、鎌足公より四十餘代の曾孫に忠家と云ふ人がございます、此の忠家の子に正家と云ふのがございましたが、始めて美濃の國に住居を致しまして加藤武者と言ひました、此の正家の十餘代の孫に清忠と云ふ、此の人が浪人致して尾張愛知郡中村に住んで居りました、浪人の生計と云へば大概定つて居ります、武藝の指南か尺八の指南でございます、然るに此の清忠どのが武士奉公を致して家を興し名を揚げ様と云ふ事の出來ない身体と爲つて居ります、と言ふのは此の人身体に創傷を受けまして、世に言ふ跛でございます、尤も跛だから云つて武士奉公が出來ぬと云ふ事は無い、甲州武田の軍師と言はれた山本勘助道鬼齋の如きは、眇で跛と云ふ……、併し此の清忠と云ふ人、此處に手習師匠を始めました、幸ひ寺

子に遊ぶ子供等も三四十人でございますが、まだ世は未開の頃でございますから、充分教育する事が出來ません、今までは檀那寺の和尚が小遣金取りに小僧達を集めて、手跡の指南をして居りました、夫れを引受けて清忠先生がなさるのであるから、仕込むのに骨が折れますな、小刀を前半に帶して袴をつけ、机に向つて行儀に坐つて見て居りますから、始めの内は子供等が能く習ふ、五日十日と爲つて參りますと云ふと、元來清忠と云ふ人は柔和な人でございますから、少しも小言を仰しやらん、サア斯うなると子供は直ぐにつけ上つて、此の先生は恐くない と云ふので行儀を惡くして、手習ひなどは少しもせん、硯の蓋に小さい墨をへばり付けて夫れを引合ふ者もあれば、算盤を並べて置いて其の上を傳つて歩く、仕樣の無い惡戯を始める、其處で清忠どのも見兼まして 清忠「之れ〳〵何せ手習ひをせんのだなまけて居つてはいかんぞ、夫れとも何にか只今までのお住持は手習を致さんでも好いと仰しやつたのか」 言ふと子供と云ふものは恐ろしく誠らしき虚言をつくもんだ、 子供「ハァお寺樣が言ふには手習ひし無ねでも好い、 喧嘩しねね樣に仲好く遊んで呉れば好いと云ふでがすでな」 清忠「ハハァ只今まで何にか、お寺の住持は手習致さいでも好いと仰しやつたか、 はて扨困つたもんだ」 と清忠は思つた、之れも生臭坊主で金さえ取れば好いと云ふ奴なれば其の儘にうち棄てゝ置きませうが、根がお武家樣の事でございますから、何んでも行儀は正して手習ひを能くせねば、爲らぬと之れから子供等に向ひまして色々と言ふて聞きました、 すると物は教る其の人に依て何うにも爲るものでございますから、追々と子供等の行儀が正くなつて參りました、 夫れ故親達も誠に喜びまして、 清忠先生のお蔭で子供は賢い者

に爲つたと先生〳〵と持囃します、夫れ故少々位の廻り道をしても、清忠先生の機嫌を聞きに參る、何にか用事があれば各々駈けつけて參つては働いて呉れやうと云ふ、清忠先生も誠に具合が宜しい、所がいまだ定まる女房が無い、然るに或る時子供の親父達が三四人、清忠の家に集つて參り、○「先生、お在宅でございますか」清忠「之れは〳〵各々方、能うお出でに相成つた、○「何うか先生搆はしやるな、お獨身で茶なんぞ汲んで貰ひましては痛み入るんでございまして……實は今日私共が揃つて出て來ましたのは、何うか先生に御新造をお世話したいと云ふので、私共が兼々相談をしたのでございますが、何うでございます、あの明神樣の神主の娘子は、綺量と云ひ先づ此の村ではあんな學者は無ね、先生の御新造には丁度宜かるべねと云ふのでございますが、如何なものでございませ

う、夫婦に爲りますまいか」清忠「誠に千萬辱け無いが、斯う申す清忠は、お笑ひに相成るかは知らんが、神官の娘は此の村では容色が宜しいか存せんがお斷りを申す」○「ハア氣に入りませんかな」△「あゝ吉兵衛、そりや先生の氣に入るめね、尻がチッとでかいから、坐らした時は目に立たんが、立した時は劈がでかいから具合が惡からう」○「成程さうだな……、夫れじや先生何んなものでございませう、名主庄左衛門の娘は、今歳二十一に爲りまして、容色も一二を爭ふ位でございますが……清忠「折角だがお斷り申す」○「はていきましねねか……、成程違ひねね彼の娘子は目の下に黑子があるから……、併し先生、彼れが氣に入らねねと此の村ではマア何うも先生の氣に入る樣な女は無ねが……」清忠「イヤ折角各々が言ふて呉れるのだに依て私が遠からあれなる婦人を迎ねたいと思ふて居るのがある」○「はて誰

れの娘子でございますな」　清忠「實は名は何んと言はれるか知らんが鍛海屋五郎助どのゝ姪を貰ひたいと思ふので」　○「彼のお鈴でございますか、彼の化物を……、　鍛治屋五郎助の姪のお鈴と云ふのはあを言はつしやるな……、　先生マアヤラ〳〵した事れは人が化物だと言ひまして、男が女に生れ換つたに違い無ゐでがす、身の長六尺もあらうと云ふのでがして、体量が二十五貫もありまして、彼の女には誰れも言ひ寄るものは無ゐのでがすわ」　清忠「イヤ假令化物でも何んでも構はん、彼れを何うぞ私に貰ひたい」　○「何うも先生は變つたものであるねゐか、彼んな女を貰ひたいて本當でがすかな」　清忠「身共は武士である、決して虚言は言はん」　○「夫れなれば早速先方へ話をして見ませうから……」　御免なさいと云ふと三四人の人は暇を告げて鍛治屋五郎助の所へ遣つて來ました」　五郎「之れは〳〵村方の旦那樣でご

ざいますか」　○「イヤ早速の相談でがすが、お前の所の姪のお鈴を嫁に遣らつしやらないか」　五郎「旦那樣、有難うございましてが、何うぞヤア嫁に遣りたいと思ふのでございますが、好い塩梅に貰つて呉れ手が無いものでございますから、併し私等夫婦が叔父、伯母の間柄だと云つて本人が承知せんければ爲りませんで一つ聞いて見ませう……、之れお鈴や、此方へお出で」　お鈴は呼ばれましたから、臺所の用事を止めて遣つて來ました、　お鈴「叔父さん何んでございます」　五郎「お前の身の事に就て村の旦那樣がお出でに爲つて、お前も最早二十二であるから、何日までも獨身で居る譯にはいかない、嫁に行く口があるから嫁にいかぬかと云つて、御親切に言ふて下さるのであるが、お前何う思ひなさるか」　お鈴「叔父さん、そりや私も固よりお嫁に行きたい氣はしない事はございませんが、御覽の通りの姿だし、兎ても

私の様な者を嫁に迎へて夫婦仲好く暮して下さるお方はございますまいが、私の様な者でも貰つて下さるなら参りたうございます、併し先方様は何う云ふお方でございますか、其の男に依つたらお嫁に参ります」　五郎「旦那さま、今お聞き下さる様な譯でございますが、先方の人は誰れでございますかね、何れヤア目の前で言ふのも可哀相でございますが、人には化物だと言はれて居る……、お鈴怒るな、お前は化物じゃ無い、人間だ、人間だが化物に能く似て見ると云ふので……、貰ふて遣ると云ふお方は何の人でございますな」　○「其のお鈴さんを貰ひたいと云ふのは、私達の子供を教はつて居る清忠先生で……」　五郎「何んでございます、清忠先生だと、戯談許り仰しやいまして　○「イヤ夫れは本當でがす、清忠先生の方から、名指しで以て五郎助の姪なら貰つても好いと仰しやつるので、神主の嬢さんでも名

主の嬢さんでも氣に入らねと仰しやつて、若しや人違ひであるまいかと、思つてあのヤ……ヤ……、怒らつしやるな、化物な女だ、尾張中村の近所でもあゝ云ふ女は外に無いと言つたのだが、矢張外の女は厭だ、お鈴さんなら貰つても好いと猶しやるので……」　五郎「何うだ、お鈴、お前清忠先生の所へお嫁に行くか」　眞赤に爲つて聞いて居ましたお鈴は、　お鈴「叔父さんや、私も清忠先生なら所夫に致しても宜しうございますので……」　聞いて居る百姓衆は驚いた、清忠先生ならお嫁に行つても好いが、外の者は厭だと云ふ、之れヤア自惚れと云ふ者は妙なもんだと呆れて居る……、併し双方が承知をしたのでございますから、話は此處に纏りました、其處で貰道吉日を撰んで清忠とお鈴が結婚の式を擧げまして借老同穴の契を結ぶ事に相成りました、之れは清忠が何故望んで鍛治屋五郎助の姪お鈴を貰ふたか

と云ふと、己れは大職冠鎌足公の後胤でありながら名る揚げ家を興す事も相成らず致して、草深き中村の里に手習師匠を致して居るなどとは先祖を辱しむるも同様、併し身不運に致して不具と爲り、最早世に出る望みはございませんから、せめては己れの子に家を興し名を揚げさせたいと思ひますから、夫れには母の氣象と云ひ、または体格等も母の身体に受ける事が多くございますから、幸ひ此の五郎助の姪のお鈴は女に似氣なき身の長六尺一寸もあらうと云ふ、されば夫れ伴なる力量もありませう、彼の巴御前の腹から致して、驍勇なりと言はれし朝比奈三郎義秀が生れし徴もあると云ふので、望んで遂に之れなるお鈴を妻に迎ねたと云ふのは、清忠實に感心な心掛でございます愛嬌諧君、して見ると顔や姿の餘り何うも優しい、立てば芍薬坐れば牡丹、歩く姿は百合の花と云ふ様な女では兎ても好い子

は生れませんな……、さて清忠どのはお鈴を女房に迎ねて仲好く暮して居るのでございますけれども絶へて姙娠致す様子もございません、三年經つて子なきは去ると云ふ古人の言葉もありお鈴は誠に心配致して何卒子を諸けたいと、此處に中村明神の境内に鎮座まします所の、毘沙門天の社へ對して、祈願を籠め、遂に世に言ふ申し子と云ふ、此處に倶蘇利夜叉の再來、即ち法華經の大行者、後年清正公大神御出生の卷でございますがチョッと一服致しまして……

第二席

清忠と云ふ人は敢て妻をうとんづると云ふ人ではございませんが、明暮お鈴に向ひまして、何うか其方の体格に似たる所の勇

士豪傑を儲けて、加藤の家を興したいと云ふ事を言はれます事ゆへ、お鈴も一日も早く子を儲けたいと思ひますが、之れは人力の及ばん所でございます、子寶と云ひまして出來る所にはヨコ〳〵能く出來るものでございますが、出來ない所は如何程欲しがつても出來ませんな、隨分何うも親父の痔腕では夫婦さし向ひでチッと骨が折れると云ふ所へは毎年〳〵出來た其の揚句に二子を產んだの三子を產んだなどと云ふ……、此處にお鈴が考へましたのは、神佛の力を借りて、子を授けて貰ふに若くはなしと心得ましたから、中村明神の境内に鎭座ます所の毘沙門天へ對ましして、夜毎に三七二十一日の間、所天清忠が寢靜まるのを待て跣足參りと云ふ、夫れでこそ神佛の御利藥がございませう、隨分甚しい奴は好いた女の手を曳きまして途中巫戯ながら參詣をする奴がある、さう云ふ奴には却て罰が當つ

て痳病か梅毒を病ふに定つて居りますが……、丁度滿願の其の夜でございます、清忠と共に添寢をして居りますと、お鈴々〳〵と頻りと呼び起すものがございますから、眼を醒して見ると、「善いかな、〳〵、其の方の願ひ切なるに依つて、今は天下麻の如く亂れたるが、其の亂を鎭める程の豪傑を汝に授けるなり」と言はれた所の其の人の姿は、黃金の鎧、黃金の兜、左の手に五輪の金塔を持ち、右には鉾をついてお出でに爲ります、之れぞ即ち毘沙門天でございます、毘沙門天は七福神の一つでございますが何う云ふものか恐い顏をして居ます、大黑天でも惠美須でも辨財天でも皆ニコ〳〵笑つて居る、夫れに毘沙門天だけは福の神の中に這入りながら、何せ恐ひ顏をして居るかと聞いた奴がある ○「毘沙門天さま、貴方は何日も怒つて居るが、チッとニコ〳〵笑つて居たら何うで」 毘沙「笑はない」 ○「何にが

笑はない事があるので」　毘沙「怒つて居るのでない、わざと怒つて居るのだ」　○「何せでございます」　毘沙「怒つて居ねば爲らぬ譯がある」　○「何う云ふ譯で」　毘沙「此の左の手の上を見ろ」　○「左の手の上には五輪の塔が立つて居るでございませんか」　毘沙「さうよ、夫れだから怒つて居る」　○「何せ怒つて居るので」　毘沙「困るな素人は、ハッの立つた時は皆が借せ〳〵と云つて仕方無いから……、何んの話かチと如何しきお話で恐れ入りますが……、其の今毘沙門天が現れてお言葉を受けたのでございますから、ハッと目醒めて見ますれば、之れぞ南柯の一夢でございますから、お鈴はさては毘沙門天がつたなき所の願籠めを受納ましたのかと小躍致して喜びました、夢とは言へ默つて居られませんから、所夫の清忠に話をしました、が、清忠も共々喜びました、能くこそでかしたぞ、能くも爭んで呉れた、懐姙して呉れ

たと喜んだのは、斯りや喜ぶ筈でございませう、少しお話は違ひますが、禁裡北面の武士で彼の有名な三位頼政と云ふ人と共に勇名の轟き渡つた石川左衛門尉と云ふ人の御新造は、心得違ひにも榜垂右京次郎保輔の祠に一子を授け給へと願ひました、所が到頭石川五右衛門の樣な者を授かつて了ひましたが、毘沙門天が夢のお告に授かるのは、天下を轟かす樣な勇士豪傑が授かつたと思ひますから、夫婦は大に喜んで居ります、其の中に月の物を見ないと云ふのでございますから、之れ懐姙の徴であると云ふので指折り數へて十月十日の日をば相待つて居りましたが、丁度八月目に相成りまして可愛や所夫と頼む清忠どのは風邪の心地とうち臥しましたのが、追々重く相成り、枕が上ら ず爲りました、醫者も最早匙を投げて何にか遺ひ遣す事あれば今の内に言ふて置くが宜しいと云ふ誠になさけ無い言葉でござ

いますが、併し命は天の借すもの、天命には醫者も勝つ事は出來ません、何うかすると醫者を怨むものがある、あの醫者にかけないで誰某さんにかけたら死にはすまいにと云ふ、誠に醫者は迷惑でございます、お醫者其の者でも長命はしたいと云ふので養生をするのでございませうか、天命許りは仕方がございません、藥も此處に至ては効のないものでございます……、遂に藥みに致して居りました我が子の顏も得見す致して、清忠に於ては冥土の人と相成りました、サァお鈴の嘆きと云ふものは身も世もあられん許りでございますが、叔父の鍛治屋五郎助夫婦の者を始め、子供が世話に爲つて居る親達は集りまして、「マァ〳〵御新造、只の身体でないから、さう嘆きなさるな、身二つに相成つて旦那樣のお種を世に出しなければ、旦那樣に相濟みませんゆへ、氣を丈夫にお持ち遊ばさんければ相爲りません

」と問ひ慰めまして、やう〳〵に葬式萬端相濟みました、さて女一人が一軒の家を搆へて居ると云ふのも不便であるし且つまた臨月間近に爲つて居りますから、其處で鍛治屋五郎助の方へ世帶を負ふて引移る事に相成りました、然るに不思議な事には女が懷姙いたしますと半分は病氣で、ッヮりとか云つて生唾を吐く、顏の色澤は變つて了ふ中にも饒々しい女は唸つて居る、所がお鈴さん、腹は前にせり出して居るが、風邪一つ引かない壯健なものでございます、却て傍の者が、「お前は、マァさう云ふ身体に爲つて、荒い業をしていかない、餘まり高い所へ手を揚げていかないなぞ」と意見をされる樣に心持が宜しいので、身体の具合が好いから、ッイ掃除の手傳なぞをする樣な譯でございます、然るに或る日の夕方の事でございましたが、五郎助の女房が風呂に這入つて居りました、傍へ來ましたお鈴が、お

鈴「伯母さん、熱うはございませんか、水をあげませう」伯母「あゝ、決して搏つてお呉れで無い、お前は最早臨月だと云ふに依て、今にも産の氣がつくかも知れない身体、はした無い事をしてお呉れでない」お鈴「イヽエ、私はチッとも辛度い事は無いのでございますから、肩をてすりませうか」伯母「イヤ搏はずでお呉れ」言つて居る折からに隣りの家にガテ〳〵ッと云ふ物音でございます、アレッ……と云ふと火事だ、〳〵と云ふ騒ぎだ、お鈴「あれ伯母さん火事でございますので」と云ふと据風呂、一名を五右衛門風呂と申しますが、大人が一人這入つてユッタリ身体が洗はやうと云ふ、其奴にお鈴が手をかけた、伯母は驚いて、伯母「あれお鈴さん……」と云ふ内に据風呂の中に伯母を入れた其の儘、七八間離れた所へ持て行つて据ゑました、幸ひ此の失火も大事にならないで、大勢が寄つてたかつて消しましたが

後にて人々不思議に思ひました、据風呂の中には湯もある其の中に女が一人這入つて居る、其奴を輕々と持て行くと云ふのは如何に非常な場合と云ひながら出來さうも無い事でございますから、之れはお鈴自身も不思議に思ふた位でございます、尤も勇士豪傑を腹に孕んで居る時には其の勇氣が自然と母親に出でると云ひますが、後年に相成つて虎之助清正と云ふ豪傑が居るのでございますから、其れだけの力量が出たものでございませう、所が困つた事には十月と相成りましたが少しも産の氣がつく樣子がございませんから、當人は大ひに驚きまして之れは世に云ふ腸滿と云ふ病氣でないかと産婆に見て貰ふと、確に之れは赤子さんがお宿り遊ばしたんだと云ふ、他の産婆にも見て貰ふと皆同じ事を云ふ、尚確め樣と云ふので醫者に見て貰ひますと、之れは腸滿で無い懷妊して居るのだと云ふから夫れでは月

を取違ふたのかと思ふて居りますと、翌月に相成つても産れません、其の翌月と爲つても産れない、到頭弘治二年六月に相成りました、丁度十六ヶ月目でございます、尤も之れは胎内に長く居る程世に秀でたるものが生れやうと云ふのであります、毎々申します通り、彼の有名な武蔵坊辨慶なぞは十八ヶ月も腹の中に居たと云ふ、また八幡宮として祭ります、應神天皇の如きは三年三月の間神功皇后の胎内にお出でに爲つたと云ひます……此れは十六ヶ月目に相成つて産の氣がついたと言ふのでございますから、サア産婆は駈けつける、其の代り腹は馬鹿に大きく爲つて居るに違いございませんに居る其の者は生長して居るのでございますが、怒しく何うも輕い産が重うなければならんのでございますが、夫れ故當り前なれば胎内丁度弘治二年六月二十四日の夜明方東の方より日輪さまが登ら

うと云ふ折しも、オギャ……と云ふ、産聲高く産れ出ましたのは、玉の様な男の子でございます、併し恐ろしく大きな産聲であげた相でございます、尤も産聲が餘り高いと何うも御近所に氣の毒なと思ふ人もありませうが、之れは何にも差支はございません、何うかすると産れた時に泣かないのがある、啞じやないかと産湯の盥の中へ入れると始めてお湯の中に這入つて温い所へ浮世の風に當つたのでございますから泣き出す、夫れもヒイ〳〵と云つて泣くのがある、そんなのは直ぐ肺病か何にかで夭死をして了ふのでございますが……、今産れたのは大きいの大きくないのじやございません、普通の幼子にしましたら餓生位の身体はある、さて此の子の名前を何んと付けやうと種々相談を致しましたが、親父の清忠を取つて清何とは幼子に名乗られませんから、弘治二年は辰の年であるが、天文二十三年虎の年

に懐承したと云ふので、虎之助と名を附けました、匐ねば立て立てば歩めの親心と云ふ、お鈴に於ては懸しい所天が斯樣な男の子を見られたら、さぞやお喜びに爲るだらうがと人知れず涙は袖をぬらす事もありました、所が此の虎之助長らく胎の中に居たのでございますから齒の生ゑるのも早い、何にかにつけて總体に發達が早うございます、生れ出ましてからモウ四ケ月目の五ケ月目に爲りますと其處等此處等を匐ひ廻る所で無い、其處等此處等をスタ〳〵歩きます、赤子と云ふ者は、產れ出ましてから、八月目に爲つて匐ひ廻らうと云ふ、其處で甑生までに歩くのは、チと早や過ぎると云ふので、甑生前に歩く子には歩かせん樣に、一升の餅をば脊負せる、赤子に一升の餅は重たいからヤッパり匐つて居る、夫れで歩く樣にあるとまた二升の餅を脊負せると云ふのが昔の習慣でございます、所が四月や五月で以

てグン〳〵〳〵歩くのでございますから、始末にいかない一升の餅を脊負せたが平氣でヤッパりてく〳〵歩く、二升の餅でも平氣でテク〳〵歩く、三升でも平氣だ、仕方ないから、五貫目の石臼を脊負したが、其奴を脊負ふて駈け出して了ふ、まさかそんな事もありますまいが、恐ろしく力量が強いのでございますから、五郎助夫婦もお鈴も誠に喜んで居ます、誠に凡人ならん幼子である、成長の後は名を天下に揚げる者であらうと其の成長の程を樂んで待つて居ましたが、虎之助虫氣一つも無く致して成長致して參る、早や五歳位に相爲りますと、普通の子供の十二三位の身体があるさうでございませう、後年に至っては御身の丈が七尺五寸と云ふ、夫れに金の三尺立烏帽子を被るから一丈五寸、栗毛の大馬にうち跨つて朝鮮國へ乘出した時には朝鮮人は驚いて、日本の清正と云ふ鬼上官身体も大いが、

頭の長いと云つて、三尺の立烏帽子が頭に被つて了ふと思ひました……、或る日の事でございましたが、お母さんから致して饅頭を貰つて頻りと門先の所で以て食べて居ました、所へ傍へ遣つて來ましたのが郡奉行淺井金右衛門の飼犬でございますが洋犬と違つて、恐ろしく大きな日本犬でございます、虎之助は精出して饅頭をちぎつて、プチよ、〳〵と云つて遣つて居る内に、犬め虎之助は身体は大きいがまだ子供でございますから、畜生ながら幾らか侮りましたか、ちぎつて貰つて居るのが面倒臭いから、一口大きく食うと心得たか、ソンと云ふと行きなり虎之助の持て居た饅頭をガツと食ひにかゝつた、犬が噛む程ではございませんが聊か歯が當つたから、其の儘饅頭を取落した、犬は其奴を食て了つて、畜生の淺ましさまだ手にあるだらうあれば、取つて食をうと見て居る、今まではプチよ〳〵と饅

頭を遣つて居たのでございますが、忽ちの間に柳眉を逆立てました、實にや威あつて猛からずと云ふ清正、ニコ〳〵笑つて居る時は如何に立腹致して居る者でも思はず笑を含む位、怒る時には天魔鬼神も面をひけ様がないと云ふ位でございますから、虎之「プチよ來い〳〵」と云ふてお呼びに爲つた、犬は神經が遲鈍でございますから、己れが悪い事をしたとは思はない、尾を掉りながら虎之助の傍へ來ました、虎之「此の畜生、坊の饅頭を取つたな、取らんでも坊はちぎつて遣る積りであるんだ、夫れに坊の饅頭を取つて、此の口が取つたか、言ふと左の手を下顎にかけた、右の手を上顎にかけました、大きな犬でございますけれども虎之助の力量は大人も及ばぬ程の力量でございますから、犬はグウ……グウ……と唸つて居る、虎之「ヤイ畜生、坊の饅頭を取つた代りに斯うして遣る」とムウン……と力を入れま

したから、犬め堪らない、口を開いた、其奴を何も力量を入れるとヒリ〳〵ッと口が裂け始めた、犬は苦しいから、ヲ……と云ふ奴到頭口を引裂いて了ふた、夫れ故犬は夫れなりきり死んで了ふのでございます、けれども折悪くも通りかゝりましたのは、郡奉行淺井金右衛門の小役藤助と云ふ者でございます、之れを眺めて藤助「ヤア己らの所の旦那が大切にしてござる犬をとんでも無い事をしやがつた、此の鍛治屋の腕白野郎めが」と云ふと行きなり禁髪を取つて引据ゑやうとしたのを、ヒラッと身体をひねつて置いて、何にをさらすかと云ふと、ドン……と一つ身体を突いた、後年七十五人力あつたと云ふ虎之助にドンと胸の邊りを突かれたのでございますから、ブウン……と七八間飛んで行つてぶつ倒れた、藤助「畜生、恐ろしき力量だ、斯りやいかんわい」と云ふと其の儘ま馬地三賢淺井金右衛門の所へ逃

げ歸りました藤助、藤助「旦那た、、大變でございます、旦那大變でございます、ヒリ〳〵ペリ〳〵ブウン……で」金右「之れ何んに言ひなさるのだ、何んだ藤助」藤助「何んだじやございませんん、鍛治屋五郎助の内に居る彼の虎之助と云ふ小悴でございます、旦那が可愛がりてお出に爲ります犬をば、悪戯をするにも程のあつた者でございます、仕様もない悪戯をしまして」金右「あゝ首へ繩でも括りつけて引張つて歩いて居るのか」藤助「イヽエそんな事でございません、犬の上唇と下唇へ手をかけて、べり〳〵と引裂いて了ひました」金右「何んだ藤助、夫れをお前が默つて見て居る奴があるか」藤助「夫れが早いのでございます、仕方ないから私が此の悪戯が、とんでもない事をしやがつてと襟髪摑まえて引張つて來やうとしますと、私の手を引拂つて置いて、突飛されたんでございます、私も彼の小悴に突飛されると

思ひませんでしたが、ブウンと七八間飛ばされました」　金右「馬鹿、子供に突飛されると云ふ様な不細工な事があるか、併し犬と雖も左様な悪戯を致しては棄て置きならんと、淺井金右衛門は大層立腹に及びました、早速下役に言ひつけて、鍛冶屋五郎助の方に懸合に参り、遂に虎之助を引連れて帰りました、五郎助の宅では大ひに驚きまして據ろ無いから此處に虎之助を妙國山日妙寺に寺入をさせやうと云ふ虎之助寺入のお話でございますが、チョッと息を續きまして……

第三席

親の光は子に光る、村方では御恩になつた清忠さんの坊子だと云ふものもあれば、生れながらに致してお父さんの顔を知らない可哀相な子供だと云ふものもある、虎之助には自然に備はる仁徳と云ふものがあるのでございませうか、諸人の最負が強い夫れ故郡奉行淺井金右衛門の所へ連れて行かれて了つた時に、サア村内は大騒動、殊に五郎助夫婦にお鈴は狂氣の様に相成つて居ります、斯うなると昔の出家は何にかにつけて信用がございますから、解らん事や捫着た事があると直ぐにお寺の住持へ聞きに行くのは一般でございます、其處で此の中村の妙國山日妙寺と云ふお寺がございますから、村で相當口でも利こうと云ふ人々が遣つて参りました、○「さてお住職、貴方に斯んな相談をかけまして誠にお氣の毒な譯でございますが、虎坊子の事でございますんで、元を正せばヤァ郡奉行の淺井さんの犬が宜しく無ゐでがす、併しお奉行様が理を非に曲げて連れて行かれては仕方がございません、幾ら私共が嘆願をした所で仕末に終ゐ

ねゐ所でがすから、方丈さんにお頼み申して淺井さんの方へ託を入れて戴きたうございますが」　住職「イヤ愚僧も氣の毒に思つて、實はお前さん方に相談しやうと思つて居りました位、宜しい、引受けました」と之れから村の者をば待たして置きまして日妙寺の住職日延が、淺井金右衛門の玄關へ遣つて來ました、　日延「頼みます、願ひます」言ふと郡奉行の爲にも桂那寺の事でございますから、早速奥の客間へ通しました、　煙草盆が出る茶が出る其の内に淺井金右衛門夫れへ立出でました、　金右「之れは〳〵御住持、好うこそ見ゐました、何にか御用かな」　日延「さて淺井どの、今日は愚僧が頭に免じ衣の袖にかけ是非頼みを一つ聞いて貰ひたいので參りましたが……」　金右「あゝ解つた、さては兼々お話のあつた本堂の建換へかな」　日延「なか〳〵以て左樣な事ではございません」

金右「ハハア夫れじや畳換ゐか」　日延「何ういたして」　金右「然らば」　日延「さう云ふ譯では御座いませんので何にか、客殿の普請か」　金右「然らば地領をふやしたいから一つ願つて呉れろと云ふので」　日延「イヤなか〳〵以てさう云ふ譯で無いので」　金右「ハハア解つた、表向は喧しいが内々で大黒の一人でも置きたいと云ふので」　日延「之れは怪しからん、何うも」　金右「夫れでもチッとも解らんで無いか」　日延「愚僧が言ひ出さぬ内にお手前がさう早合點をされては誠に困ります」　金右「何んだか言ひなさい」　日延「外では御座らんが、五郎助の姪が産んだ虎之助が、今日お手前が大切に飼ひ置かれる犬を裂き殺したとかぶち殺したとか言ふ相で、虎之助を召捕らきたと云ふ事でござるが、之れは召捕られたのではあるまい、屋敷に呼んで意見行儀をさつしやるのであらうが愚昧な百姓、さうは思はずにチッと言ひ難い事だが、御身を蔭

で馬る樣な譯で、就ては愚僧が賴みに參つたのは何うか虎之助を愚僧に渡して貰ひたいもので御座るが……」　金右「あゝ住持、成程百姓はさう思ふで御座らう、此の金右衛門が何にか犬を殺された其の返報の爲に犬の仇討同樣に虎之助を殺すのであらうと思ひませう、拙者も拳行だ左樣なたわけた事は決して致さんが、併し何んと恐ろしき力量でござらんか、彼れは成長の後必ず國家の爲に力を盡すものであらうと拙者も末賴もしく思ふて居るので、併しながらまだ虎之助、頑是ないと云ふても好い位な幼子、此の儘に捨て置きました其の日には、ッィ其の力が害と爲り、友達と喧嘩をして、うち殺すと云ふ樣な事あつては當人の爲に甚だ惡いと心得、懲しめの爲に當屋敷へ伴れ來つて何んとか工風を致さうと思ふて居るので、就ては住持、斯う致さう、一旦お手前に引渡すに依り、親元へ連れ歸つた上、お手前

の弟子として下さらんか、さう致せば拙者も顏が立つ、また當人其の者も出家得度を致して、學問が充分に出來ましたら、無益な力を出す者ではない、固より僧侶の身の上に爲つたからと云つて、一朝國家に事ある時には、衣を結んで襷と致し、彌陀の利劍を横たへて戰場に望むと云ふ事は往々ある事であるから……」　日延「之れは恐れ入りました、さすがは郡拳行をお勸めに相成るお手前のお言葉、斯樣承はれば此の日延も村内に顏なれた顏も立ち、また愚僧も怪力無雙なる虎之助を弟子にすると云ふ樣な喜びは他にござらんので、夫れでは何うかお引渡しを願ひます」と言ふので之れヘヘ〳〵として居る虎之助を受取りましたが、早速日妙寺へ戻つて參りましたが、村の誰彼れに對して、淺井金右衛門の言葉、出家の事ゆへ虛言はつかんが方便を以て、日延「實は郡拳行が何うも渡す譯にはいかん、大切

な犬を殺した虎之助だに依て、併しお前がだん〳〵と詫を入れて頼むものだに依て、生命だけは助けて歸すが、何うも此の儘に助け難いから、出家にして呉れろと云ふ淺井さんの言葉だ、其處は愚僧の弟子に致さうと言つて連れて歸つたが何うか其の積りに居て戴きたい」○「イヤ何うも樫那さま有難うございます何うか宜しくお願ひ致します」鍛冶屋五郎助夫婦にお鈴も來て居りますから、○「ナァお鈴さん、全体マァ此の虎さんは產れない前にお父さんが死んで了ふなんて不幸な子供だ、又お前もまだ年が若いから他へ嫁入りさつしやいと云ふのに貞女両夫に見えすと云つて、虎之助さんの脊長が伸びるのを待つて居やうと云ふお前様の心懸け、此の村中ではお前様を褒めないものは無い位だ、併しマァ今度斯う云ふ事になつたんだに依り思ひきつて出家にさつしやいませ、何日も御法談にお上人様が言はつし

やる通り、一人出家を遂ぐる時は、九族天に登るとか言つて、マァ清忠先生だからと云つて草葉の蔭で別に怒らつしやる事もなからうと思ふから……」お鈴は涙に暮れてヲッと聞いて居りましたが、心中は燃える樣だ、所夫清忠が加藤の家を何うか興させたいと言うて居たんだ、其の言葉をうけついで虎之助の成長を楽みに相待つて居たのでございます、けれども斯うなれば是非に及びませんから、お鈴「宜しうございます、皆さんにお願ひ申します、お任せ申しますから」と言ふので此處に村内の者は萬事を日妙寺の住職日延に虎之助の身の上を頼んで置いて、引取る事に爲りました……、さて三つや五つの子に頭を剃り丸めるのは誠にいたゝしいから、日延と云ふ住持も出家とは言ひながら一器量ございますわい、此の子はなか〳〵出家に相成つて生涯を終る者では無い、何れ還俗致す者に違ひ無いと見込

みましたから、坊主頭にはしたくないと云ふので、年の行かぬのを幸ひに、稚子姿と致して之れから、我が手元に置いて學問の稽古をさす、折々は法華經二十八梵に反点をつけて之れを讀み聞かせる、年は行きませんが虎之助、幼心に己れの心に痛く銘じましたのは陀羅尼經第二十六段でございましたが、此處に佛法の修業、學問の稽古に精を出しまして、あしかけ三年と云ふもの何のお話もございません、丁度八歳の折からでございましたが、例年中村明神に祭禮がございます、何んと言つても幼子でございます、祭禮をば見たい樣子に見ねますから、師匠と弟子の間柄、今日一日は叔父の所へ歸つて遊んで來るやうにと暇を出されました事ゆへ、虎之助は喜び勇んで久々鍛冶屋五郎助の家へ戻つて參りました、サア五郎助夫婦にお鈴は何うも早や大喜びでございます、いまだ圓頂黑衣に姿を變ねたのでございませんが、一旦お寺へ弟子入をして見れば、世に親は無いもの、また子で無いものと思ひながらも、親子の愛情と云ふものは理以外でございます、併し田舍の祭禮の事でございますから偏飩を打つわ、蕎麥を打つわ、赤飯を炊くわ、食べるのか何によりの祭禮でございます、其の夜は兼て師匠から許しを受けて居ますので、一夜は叔父の家に泊つて參つても好いと云ふのでございますから、お鈴に於ても子を思ふ親心、久々で傍へ寢かしたいと云ふので、夜更に及んで各々枕に就きました、然るに虎之助は幼子には珍らしい夜半に厠屋を催しましたから、便所へ參りまして用をたし、戻つて參らうと致しますと、俄に聞ねる所の大勢の人聲、虎之助はてなと耳を側てゝ聞きますと、

「じたはた騷ぐな、まご〳〵するとぶち斬つて了ふぞ夫れ野郎共、好いものは其方だ、其方を探して持出せ」と云つ

てワイ〳〵騒いで居る、いまだ八歳の幼子でございますから好い心持はしない、片邊を見ると大きな葛籠がございますから、手早く蓋をば開けまして中へ這入つて蓋をした、中で以て樣子を容つて居る内にドヤ〳〵と來つた両三名、○「エヽ頭領、此處に斯う云ふ葛籠があるんでがすがね、之れでも持つて行きませうか」　頭領「何處を探しても目ぼしい者はないな、夫れでも好いから持て行け」　蓋を開けて見やれば宜いのに、手をかけて見ると何にしろ年八歳なりと雖も身の長五尺に垂々たる所の虎之助が這入つて居るのでございますから、重たい、○「頭領重ふがすぞ、恐ろしく何うも餘程の目方でがす、斯奴は好い物か這入つて居るに違ひ無ねや」　頭領「ぐす〳〵言は無ねで早く擔ぎ出せ」○「宜うがす」と云ふとドッコイショと鐵に両手を突込んで置いて、其奴を脊負ふた、サア逃げるが肝要だと云ふと、ドン

ン四五人連れで表へ擔ぎ出して行く樣子、サア葛籠の中に居た虎之助は、斯りやいけねね、到頭已れを脊負ひ出しやがつたな……、併し何んだらう此の葛籠は……」　ヒョイと斯う手でさはつて物を見ますると云ふと、毛が一面に生ねて居る物がございますから、斯う探つて見ると假面でございます、心眼と云つて目には見ねなくても大抵形で分る、虎之「ハハア斯りや祭禮の時に冠つて舞をした鬼の假面だ」　ヒョイと左の手を伸して見ますと、手に觸つたのが、舞に使ふものでございますから銀紙張の刀で好いのでございますが、マア〳〵斯奴を間に合して置けと云ふのか、短かい所の脇差でございますから虎之助が「何處まで私を脊負つて行くかも解らないぞ、斯りや何んとか工風をせんければ爲らぬ」と中で考ねて居る中に、○「頭領、何うも何にが這入つて居るのだか、重ふがすがね、　頭領「有難い〳〵、

餘程金高の物に違ひねえ」○「何んだか中で動く樣ですせ」頭領「虚言をつけ」○「夫れでも恐ろしい重ひので、肩が抜ける樣で……」言ふ内に中に置きましては、籍を拂ひましたる所の彼の脇差、どうで神樂の舞に使ふものでございますから、切れる奴でございませんが葛籠を脊負ふて居る奴へ對して、大力無雙の虎之助が、ムウン……と云ふと、葛籠でしに突洞した、○「ヲ、痛い」△「こん畜生、奴位意氣地の無ねえ奴は無ね、葛籠一つ位脊負ひやがつてヲヽ痛いて何んだ」中では虎之助拇も拳も通れよかしとヅブ〳〵と脊骨から突洞しましたから、ウーンドレン……と云ふと尻餅ついて了つた、△「ヤイ畜生、意氣地の無ねえ」……と云ひながら、ヒョイと見ると、脊中から血潮が流れ出て居るから、△「ヤア……、此の野郎の脊中より血が出て來た、斯りや不思議だ、此の葛籠は……」とバッと葛籠の蓋を開けやうとし

ますから、虎之助、斯りやいかんと心得ました事故、片遂にわつた例の鬼の假面を被るが早いか、スックリ立上りました、後年戦場に臨んで名乘を揚げたる其の聲は三町四方に聞ねやうと云ふ大音の人だ、ワア……と云ふと鬼の假面を被つて立上りましたから、此の休を眺めましたる所の、惡黨共はアッと云ふとドン〳〵〳〵雲を霞と逃げて了ひました、其の儘虎之助は死骸を捨て置いて、葛籠を脊負ひ、ノコ〳〵戻つて參りまする……所が此方五郎助の家では虎之助が行術知れずに爲つて、見ねなく爲つたが、若しや泥棒の爲にかどわかされたのでは無いかと大騒動、此の頃おひは隨分年のいかん男の子をかどわかされます、只今じやヤア何うも餘り無い樣でございますが、此の頃ひはカゲヤと云つて男色流行の折からでございますから、美目好き男の子をかどわかすと云ふ事は一般に行はれて居りました

夫れ故五郎助の家では大騒ぎで居りました、所へ駕籠を舁ぎふて戻つて來ましたから、五郎「チヽ、虎じやないか、虎之「叔父さん」五郎「何うした、虎」虎之「私が今歸つて參りましたのは、先程此の家へ泥棒が這入りまして、斯う〳〵斯う云ふ譯でございます」五郎「何に、夫れじや駕籠の中に這入つて居たのを泥棒に舁ぎ負はれて行かれたのか、夫れにマア能く戻つて來たの」虎之「斯う〳〵斯う云ふ事に爲りました」と云ふから、五郎助夫婦を始めお鈴も大ひに驚きました、早速郡奉行所へお屆けに及びまして、役人が來つて取調べて見ますと全く賊が這入つて駕籠を舁ぎ負ひ出したのを虎之助が其の者を殺害に及んで身を逃れて戻つて來たのは事實でございますから、何のお咎めも無く今日で言へば無罪放免と云ふのでございますな……、さて翌日に相成りまして日妙寺へ戻る事に相成りましたが、唯ださへ評判の好い虎之助、狹い田舍の事でございますから、人々が寄合ふと、一

豪いもんで無いか虎之助さんは、末には何んな者に爲るだらうと大評判に爲つて居ります内に、其の年も暮れて了つて、九歳の時でございます、何う云ふ加減か師の房日延さんが此の頃中御病氣と云ふので少しもお醫者が名前をつけられない、唯だ辛度い、あゝ辛度いと仰しやる許りと、云つて年病みと云ふのでもございません、其處で唯だ不思議な事には虎之助が他のお弟子に代て、折々お師匠の枕元に依て看病を爲てあげる、虎之助が看病をしてあげる晩は、好う日延樣はお寢みに爲ります、翌日に相成ると誠に具合が好いと云ふ、外のお弟子や、寺に出入をして居る者、或は檀家の誰彼が看病を致したいと云つて看病をすると恐ろしくお疲れに爲る、然るに今までは大層御最負に致してお出でに爲つた日延が、虎之助を此の頃は厭ふ、お弟子

の者が、お師匠、今晩は虎之助が看病でございますと云ふと、「虎之助は寢かして遣つてお呉れ、お前方は次の室に居ても好いが、虎之助は何うか部屋へ引取つて寢かして遣つて呉れ」可愛いので言ふかと思ふとさうで無い、併し虎之助は師匠大切に看病を致して居りまする、然るに翌日に相成つて心好いと言ふのでございますから、弟子の僧侶及び檀家の人々は、何うも虎之助が看病すればスヤ〳〵とお寢みに爲り外の者が看病すれば苦しむと云ふのは不思議で堪らん、併し何の樣子か更に解りません事故、虎之助をば毎夜々々看病人の内に加はる事に爲りました、今晩も今晩とて日延さまは日延「之れ虎之助や」虎之「ハイお師匠樣、何んぞ御用で、お湯をさし上げませうか」、日延「イヤ湯でない、本堂の須彌檀の下に陀羅尼經を入れて置いた筈、お前尋ねて見てお呉れ」虎之「承知しました」と虎之助は雪洞を片手に致し、お師匠のお出でに爲る病室から本堂までは大分間がございます、須彌檀の下へ參つて如何に尋ぬるといへども、お師匠が仰しやつた物は絶えて無い、併し病人の言ふ事であるから、何うぞ尋ね出して持つて行つて進せたいと思ひまして、幾らお師僧さんの大切な物誰れも持つて行くものは無い、斯程探すと雖も解らんと云ふのはお師僧樣がお考へ違ひであらう、モウ一度御病氣にさからふかは知らんが、お尋ね申しあげませう」と其處で雪洞を片手に致して廊下傳ひにお師僧の居室へ戻つて參りますと、障子にうつる影法師、斯はそも如何に斯は如何に、両の耳はピンと立ちまして、口は細く尖つた、見るもツッと致す樣な畜生の姿、夫れも猫や小狗の姿ではございませんこれはと思つた虎之助は、抜足さし足忍足ツッと來つてお師僧

様の居室の障子の隙間から覗いて見れば、あら嘆けない年の頃なら十七八に相成らうと云ふ水も滴るやうな好い女が、日延さまの寢床の内に這入りまして、何にやらヒッ〳〵うち語つて居る様子でございますから、「さてこそ迂参なれ、此の頃中のお師僧が病氣と云ふのは此の畜生が仕業であらう、成程お醫者さまも病氣が解らん筈、尚また翌日に相成つて疲れ生じ、私が傍に居る時は此の畜生、お師僧様の傍に寄る事出來ないと云ふ、お師匠も畜生のたくみとは御存知なく、淺ましい女犯をお犯しに相成る爲に私をお嫌ひに相成ると見ゐる、師の御坊の一命を助けんが爲め、日妙寺の汚名をすゝがん爲め、此の畜生を退治せんければ相成らんと、親が讓りの兼光の一刀を執つてお師僧の居室へ飛び込もうと云ふ、怪物退治のお話でございますが、次席に讓りまして申しあげませう

怪力亂神を語る可らず、然しながら未開の永祿元龜天正度でございます、往々く妖怪變化の爲に苦しめられる者もあります、畢竟する所、狐狸妖怪其の物に身入られる取附かれると云ふのも本人其の者に間隙油斷があるものでございますから身入られる樣な譯で、然しながら日妙寺の住職日延も、俗に出家は色中の餓鬼と云ふ位な、其の道に杜絶られて居るものでございますから、却て深いのでありませう、美目好き所の婦人と相成り、毎夜の樣に忍んで參り、之れと交はりを結ぼうと云ふ、サァ堪つたものでありません、人間は何うしても餘り其の道を烈しく致すものは腎臟の精分と云ふものを失ひます、遂には烈しき所の

苦痛を起して參り、腎の臟が疲れる、彼の昔平將國清盛入道淨海の如きは火の病と云ふ、併し俗に火の病と云ひますが全くはさうでございません、多くの美女を愛しまして淫樂に耽りました結果が、精分と云ふものを失つて了つて、身體が熱して爲らんと云ふ……、日延のは畜生其の者と夜毎添寢をするのでございますいまするに依て、身体に疲れを來すのは尤もな事でございます不思議にも虎之助が障子の外からうつる姿を見ますと、畜生其の儘だ、中をさし覗いて見れば妖怪と添寢を致して居やうと云ふ、實に水の滴る樣な美女でございます、虎之助は今は猶豫する場合でないと心得ましたから、ガラリ障子を押開けて置いて虎之「お師匠、御油斷遊ばすな、貴方は狐狸妖怪の爲に迷はされてお出でに爲りますから、憚れ佛門の御耻辱を引出すのであります」「畜生其處退くな」と襟髮の邊りを執つて引据ゑん

といたした途端、今までは美目好き所の十七八歳に相成る娘と見ゑましたが、其の姿は何處ゑやら、ガラ〳〵、ガラ〳〵ッと家鳴り震動いたして見る〳〵内に姿は變りましたは總身眞黑でございます、口は細長う相成り、耳は竹をそいだ如くでございますな、虎之助を望んで置いて大口開いて飛びかゝつて參つたのは、態こそ大きいが子供と侮つたものでございますか……、腰に帶びて居りました所の兼光の一刀、鞘を拂つて置いて眞向からおめいて斬附けて參りますのを、畜生其の下をかい潛つて置いて齒をひき出し飛びかゝつて參る、虎之助は飛び違ゑて置いてまた斬付ける、ブル〳〵ッと体を轉じて置いて虎之助に飛び付かうと云ふ、其の内に虎之助は、飛びついて參ります畜生は何れ四つ匐に匐つては飛びついて來ないから、飛びつく時に立ちまち、其の立つた途端にナッスり柄も拳も通れよかしと突

いた奴、斬る奴は斬り損じがあるが、突損じは無い、大概年經ふ所の妖怪でも突く奴は外れませんな、人間であつたら、乳の邊りを一突き突きゑぐりました事ゆへ、キュウ……と云ふと其處へ遂に倒れます奴、二突許りでない突三突突きましたから遂には身震ひをいたして、邊りは一面のから紅と相成つて相果てました……、日延は魂消て了つて逃げる所でない、寢床の上にペチャンと早腰を抜かした樣に坐り込み、質に取られた木兎みたいに目ばかり白黑して居ました……、虎之「お師僧お氣を確に……」と云ふと震ゑて居る、此の物音を聞きつけまして、樵家の衆でございまする、或は納所、所化を始めと致しまして走せ參りましたが、各々之れを眺めて慄きました、○「之れマア何うも虎之助さま、兼て貴方の强いのは聞いて居るが、私等は何う

もお師匠樣のお部屋へさして此んな物が來るとはチッとも知らなかつたが、何んでがせうぞのマア化物は……」見た所で何にやら解りませんから、夜明に相成るのを待つて、名主を始めと致して郡役所へお屆けに相成る、御檢視の役人がお出でに爲るこれを聞き傳ゑて村内の者は、皆寄を好むのは人情でございますから見物に參ります、其處で討取りました妖怪は何んと云ふ獸物であるか、更に解りません、だん〳〵老人或は數多の書物に目をさらしてある人達が、鑑定をしましたのは之は、鼠の年經たのに相違ないと云ふ事に相成りました、全く之れは鼠でございましたか其の長三尺四五寸ございます、尤も久しきあとに動物の見世物に出ました大鼠がありましたが、之れと種類が違ひます、家に接みます所の鼠でありの或は田地田畑に接みます所の鼠は僅々三寸位で五寸と云ふのはございません、夫れが此

處に三尺五六寸まで大きく爲つて了ふと云ふのは所謂年を經たんでございます、年を經るに從ふて通力自在に相成らうと云ふ日延も日蓮上人の徹をふむ侮り難き僧侶であつたのでございますが、通力自在の獸物の爲に惑はされたのでございます、併しマア女の姿に相成つて添寢をした所を見た所は虎之助一人でございますから、默つて居ります、日延も大ひに前非後悔を致しました……、然るに此の事中村は申すに及ばず三里五里以内の大評判と相成る、所が此の中村から出でられまして、始めは今川義元の幕下の大名松下嘉平次の所へ下郎奉公に住み込んで居りましたが、今川が人の見る事を知らざるのを看破いたし無斷で松下の方をば暇を取りまして、只今にては今寶出しと言はれた織田上總介信長の御元に參つて、御取立に相成り、今では美濃國洲の股の城を預かつて美濃攻を仕樣と云ふ木下藤吉郎秀吉と

云ふ、まだ此の頃おひは高吉でございましたらう、併し秀吉の方が好う通つて居りますから、左樣申しあげて置きますが……人々機嫌を聞かんが爲に故郷の中村へ立歸られました、時に秀吉と鐵治屋五郎助とは緣者の間柄でございますから、五郎助の宅へ遣つて來ました其の時五郎助が「藤吉郎さんや、お前は身体は小さいが大層な御出精をなさつて、私の所の甥の虎之助、年はまだいきませんけれども身体はお前より大きくあり力量もあれば先立ては斯う〳〵」と話を致すのを承はりまして秀吉が成程人は其の器に逢はざれば名をなす事出來んと云ふ、加藤清忠どの、遣子虎之助、年はいかねど適晴なるものなり、私が手元へ引取つて天晴武士に取立てませう」と云ふ、之れから妙國山日妙寺の方へ此の由を申し送ると、日延も生命の親なり一命を落さうとしましたのを救ふて貰つた大恩人、わけて其の人と

爲り圓頂黑衣に姿を變へるお方では無い、必ず世の中に出られ應仁の大亂後麻の如くに亂れたる天下を鎭める所の天晴豪傑であると思ひますから、心好く承知を致して呉れましたに依り、此處に師弟の緣を切りまして水下藤吉郎の方へ引渡す事に相成りました、其處で洲の股城へ對しまして連れ伴りましたのは九歲の時でございますが、秀吉手元に於て夫れ〳〵文武兩道を仕込む考えでございます、尤も此の時桶屋の忰市松と云ふのも共々にお召出に相成つて秀吉が連れ戻つたのでございますが、之れは福島市松のお話に爲りますから、此處には畧致しますが……、元來學問は日妙寺で以て、讀書算筆等充分にお仕込に爲つて居りますから、却て秀吉よりも學問は深いと云ふ位のものでございます、夫れ故竹中半兵衛に從がはして武道の稽古を受けましたが此處に兩三年は何のお話もございません、早や十三

四歲と相成りますと、身の長六尺二三寸ございます、實に何うも大きいものでございますな、笑つた所の愛嬌はあるも言はれん位でございますが、怒つた時は其の顏の恐ろしさ天魔鬼神も面を向けべき樣はないと云ふ、然るに此のお方の初陣の功名と云ふのが、十四歲の折から越前金ケ崎の戰爭でございます、即ち此の戰爭が濟んで直ぐに姉川の戰であります……、所が目のよる所に玉がよると云つて此の虎之助清正は仁義禮智信の五常の道に協ひし大將でございますから、慕つて御家來に相成るものが大層でございます、十虎二十四將と名附けました、木村、井上、飯田、森本、齋藤、班鳩、七里、貴田と斯う云ふのが十虎二十四將と言ひまして、併し清正と云ふお方が如何に勇ありと雖も御一人にて、莫大な手功はない、即ち十虎二十四將の面々が清正の馬の前後に從ひまして、主を助けて働けばこそ清正の

勇名が全國に聽き渡るのでございます……、さて年十五歳の時に秀吉どのに於きましては江州長濱の城主と相成られた、之れは何んで江州の長濱の城主に秀吉をしたかと云ふと、屢々織田と戰ひを交ゑまするのが、淺井、朝倉でございませう、然るに淺井と織田とは不和を生じて居る中、長濱の地は織田の領分境に爲つて居りますから、稍々とも致すと、淺井より領分境を侵さうと云ふのでございますから、之れは大切な場所だ、夫れゆへ秀吉に此の長濱をお預けに相成つたのでございます、其處で秀吉に置きましては屈强なる所の御家來を擇んで、領分内を見廻る即ち巡邏、只今の行政官吏の樣な譯でございまして、當り前なれば身輕いものが領分内を見廻つて歩かして好いのでございますが、此の長濱は重鎮の地でございますから、加藤、福島片桐、或は淺野、中村、堀、堀尾の樣なものに申附けまして、

日々交代で廻らうと云ふ、或る時清正十四五名の部下の者を引連れまして、長濱の松並木にかゝりました時にワア……と云ふ人聲に、清正小手をはらつて御覽に相成ると、淺井家の足輕二十名程が右往左往に逃げ散る樣子でございますから、何事であらうと見て居る内に、諸膚脱ぎに相成りました大男二人が、互に一刀を執つて置いて、「サア來い、今の間にかたを附けて仕まをう」「言ふやに及ぶ」と上中下段一上一下と斬結んで居る……、○「エヽお頭」清正「何んだ」、○「エヽ、眞劍の勝負をして居るのでございます、淺井の見廻りの者が止めやうとしたのでございますが追拂はれて了つたんでございまして、豪い奴でございます」清正「左樣か、棒をかせ……」と云ふと清正、組下の者が持て居りました六尺棒を小脇にかい込んで置いてドン〳〵と近寄つて來た、一上一下上中下段と火花を散らして打合ふと云

ふと、大層何うも烈しく斬結ぶ樣でございますが、何うして眞劍勝負にそんな事はございませんが、眞劍勝負を見た觀客諸君もお出でゞございませうが、竹刀を持て面籠手をつけて劍術を遣ふのとは大分違ひます、イヤかすつた、竹刀込みだ、平打だとは言つて居られない、あれは面と云ふ結構なものがついて居るから、かすつた、竹刀込だと言つて居られますが、眞劍にドッコイかすつたと云つた所で頭を切られるか腕を斬られて了ひます、夫れ故チャリンと言へば何方が怪我して居る、夫れをばチャン〳〵チャリン、丁々發止丁發止一上一下上中下段三十四合とうち合つたりと言はなければ講談に爲りません、之れは虛言を虛言と承知して言ひますので言葉の花と云ふものでございます……、今二人の大男が互ひに間中段に執つて居ります所へ、清正が、御免と言つて棒を入れました、敵から棒と云ふのはご

ざいますが、松並木の横から棒が御免と這入りました、いよいよ清正が此處に有名の木村又藏、井上大九郎の両豪傑を得ると云ふお話でございます、

第五席

ヱ、此の一條は兼て豫告を致しました、「木村井上後篇天下三浪士」と云ふ標題のもとに詳しく辨じます積りでございますから極簡單に申しあげて置きます……、さて両人の武士は互に後に下つたる事にて清正の顏を見て居ましたが、清正は大音を揚げたる事にて、清正「アイヤ御両名、暫らくお鎭まり候へ、拙者は江州長濱の城主木下藤吉郎秀吉の股肱の一人加藤虎之助清正と申するものでござる、如何なる意趣遺恨あるか存せんが、白晝

剣戟の沙汰に及ぶとば穏かならぬ事、好しまた怨みあるにもせよ、お見受け申せば何れも壯年血氣の武士、天晴國家の用に立つべき御人体、古人言はずや両虎爭さう時は一虎は死し、一虎は傷く習ひに候はん、憐れ應仁大亂後亂れに亂れたる今日、世を治め上は一天萬乘より下は萬民塗炭を救はんと云ふ各々方が此の所に於て、一命を落すなんぞと云ふは嘆けなき次第、若年の某が、斯く理解に及んでは甚だ御両名に失禮ながら、今日主人の命を受けて巡邏を致す拙者なり、若年なる拙者の意見に從ひ、爭ひを止められるや、和解を致すとあれば、此の儘立別れらるべし、若しまた是非に勝負を決せんならば、未熟ながら御両名を捉め取らんければならぬ、如何でござるな御両名」述べられた時に年上なる所の大男が、「成程……、ヲイ何うする。なか〳〵此の男は見れば身体は大きいが年は若いや、先程の淺井

の奴原と述つて言ふ理屈も能く解つて居る、先程の蠅虫同様な奴なら踏み殺して置いて、此方は斯うして望み通りに仕様と思ふが、言葉の内に慈悲ある仁者に向ける刃はない、夫れとも此の人の言ふ事を用ゆる事は出來ぬとお前は言ふか」言ふと相手の男が「イヤ私も驚いた、實に此の木下どのゝ御家來加藤どのゝ言葉には感心した、今まで私も言ひがゝり上お前と斬合つたんだが、大敵と見て恐れず小敵と見て侮ぶらず、身体八膚は父母の賜物、之れを殺傷せざるは幸の始なりと云ふ、お前と此處に斬合つて怪我でもして不具に爲つては大切な母じや人に濟まん」「夫れじやお前が止さうと云ふのなら私も止めた」と此處に二人が言葉を揃へて、「お役人の御仲裁、お言葉に從ひまして此處に止めと仕ります」、清正「ハハァ之れは〳〵若年なる拙者の理解をお聞取下さる「段辱けない、事相濟んで見れば咎むるにも及

ばんが畢竟如何なる次第で眞劍の勝負に及ぼうと相成つたのでござる」、○「されば私れも三州の浪人にて井上大九郎と云ふものでござるが、酒に醉て此の松並木に來ると此の男が錢の勘定をして居るに依つて、其の錢を借して呉れと云ふと、借す事出來んと云ふ、夫れでは差して居る刀は大分の價値があるから、借せと云ふと夫れも爲らんと云ふ、夫れじや一騎討の勝負をして分捕するからと言へば如何にも一騎討の勝負を仕樣と云ふので遂に斬合に爲つたので、清正も聞いて居て可笑く爲つた、世の中に妙な奴もある、首と刀と交換を仕樣と云ふ亂暴な奴だと思ひましたが、清正「アヽヤ夫れなる御人は何んと申さる」△「されば先祖の名乘立てを致すも嗚呼の次第でござるが、近江源氏佐々木の末流にて九州浪人木村又藏と名乘るもの、父は拙者幼年の際に相果てましたに依り母と共に此の長濱へ參りましたる

所、近頃母は大病、藥を求めんとすれど其の金はなく據ろなく易者と相成りて金を貯ねんと今日は案外に金子も儲かりし故此の松並木へ來つて勘定致して居る所へ此の男來つた樣な次第でござる」清正「成程、御身の行はさながら其の昔唐土の唐石にも似たり、併し母人は御病氣とやら、さぞかしお困りであらう某も志ざしだけ……、と出しましたのが金三兩、夫れをば紙に包みまして清正「御老母が口に合ふものあれば、之れなる金子を以て、とゝのゐて差上げる樣」、傍で見て居ました井上大九郎が大九「恐れ入つた、感心いたした、加藤氏、某しは今日まで諸國をさまよひ然るべき主を擇んで仕ゐんと思ゐども、いまだ然るべき所の大將に出で合はず、止むなく斯く流浪して歩いて居るのでござるが、斯く云ふ大九郎を御家來の端にお加ゐ下し置かれますまいか」端にも眞中にも一人も家來と云ふものはない、

虎之助心の中に喜びましたが、虎之「イヤ、見る影もない此の虎之助を主人に取らうと云ふのは、誠に千高辱けないが、某まだ知行食祿も定まらず、且つ當年僅かに十五歳、兎ても御身の如き勇士豪傑を養ふだけの力はでざらん、夫れ故斯樣致さう、人木下どのか、或は清洲にでざる大主人織田どのへ對して御推舉を申しあげやう」大九「イヤ〳〵、夫れはお斷り申す、尾州清洲の主織田上總介信長と云ふ男は、天下を治める所の器量かは知らんが、此の井上大九郎の目から見ると佛法嫌ひに致して、強情我慢、我意強く、末には却て其の身を破ると云ふ人だまた御身の御主人を惡く云ふでは無いが、木下藤吉郎秀吉、當城下に來つて拙者も酒を食つて歩いて居るから、其の氣象は存じて居る、行々は天下を掌握する人かは知らないが、人間粗漏なるに依て、時に浮薄な行がある、先づ顧みに爲らんな、斯く

申しあげると、御身に阿諛を云ふ樣だが、お年は十五歳なるが吾々両名を諫めて、此の木村又藏殿に金子を惠まれた所を以て見れば智仁勇、仁義禮智信の五常にかなつた御身なり、また此の大九郎は食祿を以て主人に仕ると云ふので無い、また井上大九郎と云ふ身体を賣物にするので無い、此の後戰ひある時は御身と共に戰場に臨み、適時手柄を現はしたなら、其れにて食祿を貰ゐる事に爲るでざらんか、夫れまで拙者は御身の養ひは受けん、金子がなければ何れにか參つて借用金を致す、また借る事出來ねば斬取强盜は武士の習ひ、決して御心配はでざらん、何うぞ家來にして戴きたい」清正「不肖の虎之助をば夫れ程までに云つて呉れるのなれば、如何にも主從の固めを致さう」又藏「あゝ井上、羨ましい、斯く申せば何にか親に不孝な言葉に當るが、拙者が一人の母親、今は

大病なれど、病氣全快いたすか、或は相果つるか何れかに定まり次第長濱へ罷り越して、其々に之れなる加藤どの丶臣下と爲り、加藤どのに忠義を盡さうと思ふ、何卒斯く云ふ木村又藏を今日より臣下と思はれ下さるやう、之れより吾が住家に歸り、母に看病孝養を盡し、若し病氣全快いたすなれば、母は何れへか預け置き、長濱へ罷り越すでござるから、加藤どの何うか宜しく御頼み申す、虎之助はホコ〳〵喜びました、實に天より致して斯く言ふ清正に斯る豪傑両名を下し賜はれたかと此處に木村又藏には後日の約束に及んで別れる事に爲りましたから、又藏は其の儘我が住家へ歸る事に爲りました……、井上大九郎に於ては清正の供を致して、長濱の城中へさして立歸り、君臣の盃を致しましたが、何うも虎之助清正、之れ程の豪傑を家來にしたからには自分に五十石でも百石でも食祿が無いと云ふのは

誠にきまりが惡うございますから、木下藤吉郎秀吉の御前へ出でまして、「虎之「恐れながら加藤虎之助申しあげます」 秀吉「何んだ虎之助」 虎之「私も最早十五歳と相成り、旅幾くは御食祿をお定め願ひたうございます」 秀吉「之れ〳〵 虎之助、其の方まだ若く年、今暫らく余の部屋住で居れ」 虎之「御意ではございますが、明日にも合戰ある其の時に、拙者戰ひに臨みまして馬側にあつて助ける所の能き家來、唯だ一人も無ければ、大功を現す事は相成りません、依て然るべき家來を召抱へやうと心得ます、最早家來にならうと言つて應對をしたものがございます」 秀吉「之れ〳〵 虎之助、其の方の樣な若年者に、家來臣下と爲らうと言ふものは今日は平家の味方と爲り、明日は源氏の味方と爲るもの共である、依ていざ戰爭と云ふ折からには、此の秀吉が目鏡に協ひしものを旗下と致して遣はすから」 虎之「イヤ御主人、今

回抱に入れました所の家來は、左樣な者ではございません、非上大九郎と申すものにて我が君ですらも主に取り不足なりと申し、恐れ多くも清洲の大殿なりとも、主人に取り不足と申しまして、斯く申す虎之助に隨身いたさうと申しますので」秀吉「イヤ其の方が若年なるを幸ひと致し、一郎等と相成る敵國の間者なるか相解らん、全く其の方が召抱ゐるとなら、予の目通りを申しつけろ」其處で非上大九郎を同道に及んで、秀吉の目通りをさせましたが、身の長六尺有餘あつて、實に立派なものでございます、秀吉事の外お喜びに相成り、大九郎に御盃を下しおかれまして、秀吉「其方肝太く心飽くまで剛なれば、後年適時れ大名と爲るべきものである、隨分忠勤を擢んずるやう……、虎之助、今日より其の方五百石の扶持米を取らするであらう」虎之「恐れながら今一人木村又藏と申す先祖は近江源氏でございます

る、只今は此の長濱の街外れに住家を構ゐ居り近日の内に私の元へ參つて犬馬の勞を盡さうと申して居ります、最早主從の約束は致しましてございいまする」秀吉「フウン、斯く一度に二人を得るとは如何いたしたる次第である」虎之「實は斯樣々々然か然か斯う云ふ譯でございます」と松並木に於ての一條を物語りました、其の時に秀吉は大ひに御感心を致されまして、秀吉「虎之助、其の方は斯く言ふ秀吉はど生ある内に逝は無いか知らんが死しての後は予にまさるはど人に用ひられるであらう、人に敬はれるであらう」と言はれましたが、實に銘言でございました之れ其の人の德不德でございませうが、秀吉と云ふお方はお昇り遊ばした時には關白職から致して、太閤と爲りました、併し死んでの後は、秀頼と云ふ御子息から新八幡宮と云ふ號を戴きたいと、色々宮中へお願みに爲つたのでございますけれども、

臣子たる者が八幡の號を稱する譯には相成らんと言ふので、到頭阿彌陀ヶ峰の豐國神社でございませう、夫れに引換へ清正は法華經の大行者名も清正公大神と云ふのは到るところの法華の寺にあんありまして、日本國中清正さまと云つてございますが、豐國神社と云ふのは京、大阪だけでございまして、到る所とはいきません、して見ますると此の人は全くや倶茶利夜叉の再來、多聞天の本體とは能く云ひました……、然るにいよ〳〵清正、元龜の元年四月二十六日と相成り、越前有名の手筒山に置きまして、彼の有名な朝倉の鬼玄蕃を討取ると云ふ、清正初陣の働きのお話でございますが、チョイと一息續きまして次の席に申しあげませう

第六席

時は元龜の元年四月二十六日手筒山と云ふ所にて山攻でございます、籠る所の大將は、越前有名の豪傑、朝倉玄蕃之正景方と云へる人、其の副大將が、增目兵庫と云ふ、人數二千餘人を以て、嚴重に籠られました、然るに之れを攻めんと云ふのは大手の方へ押向ひましたのは、今や遠參兩國の主と致して、海道一の豪士と云はれました、德川三河守家康の一陣でございます、先手は彼の有名なる酒井左衛門尉忠次でございます、然るに搦め出口には織田上總介信長公の同勢一萬餘人と云ふものを從がへまして押向ひましたが、家康食ねんところの大將でございます、御自分人數は僅か三千人、大手の方へ二千を以て攻めかけ天晴れ功名をいたさうと云ふ、御自分の同勢旗本一千五百を

従ねまして、左側の手筒が森の中にて相待ちます、酒井左衛門尉忠次は五百餘人の同勢を従がねて置いて、つま先登りの手筒が大手へ、亂杭隙間もなくうつてあるのを引抜き引抜いたるとにて、ドッと鯨波をつくり揚げて、各々楯板面取場に居たる大手を望んで押し登つて参ります……、此の時城内本丸高櫓にて、風窓を開ひて小手をはらつて寄手の様子を見て居りました城主玄蕃之正景方、副大將增目兵庫に向ひまして、玄蕃「アイヤあれ見たまへ、大手の方は僅に徳川の同勢五六百、搦手の方は潮の湧くが如く目に餘つた大軍、斯く言はゞ御身を侮るに似たれども、御身は大手へ参られ、堅固に寄する敵をば防がせ候ね併し門を開ひて討つて出で給ふなよ、徳川家康は侮ぶり難き所の若大將なり……、某は大軍の事ゆへ、搦手へ廻つて織田の軍勢をひしがん」と此處に大手、搦手と二別れに相成りまして、防

いで居たのでございますが、徳川の先手三州吉田の城主酒井左衛門尉忠次、槍を執つての忠勝、采配執つての忠次と言はれし合ひ、うてども〳〵事とも致さず味方を厲しまして、忠次「討たるゝとも引くな進めや物共、北國路の戰は今日始めてに之れあるなり、見苦しき戰致して敵の者に笑はるな、死と爲つて全からんよりは玉と爲つて碎けよ物共、忠次此の所へ控へるなり」と下司が烈しくござるに依て、親うたるゝといへども子は之れを顧みず、主うたるゝとも家來は見向きも致さず、眞黑に爲つて攻め寄せまする、之れが爲に大手を守つて居りましたる所の增目兵庫は、根が猛勇と云ふ人でございまして、少しく智力が足りませんが、今僅かな敵の軍勢に勝負のつかざる事ゆへ、いでや吾れ乘出して蹴散かして呉れんと、其處で八百餘人の軍勢の内、三百餘人を以て城を守らせ、五百餘人を率いて、幟馬印

を押樹てながら、大手の門の阪を下つて眞平字、酒井の同勢へ一時に突懸りました……、唯ださゑ浮足と爲つて居る酒井左衛門の同勢、ひた潰れに崩れて麓へさして逃げ走ります、忠次聲を枯らす許りに、返せ〳〵と呼はるといへどもなか〳〵返さん景氣の好い時でも返さん、仕方ないから、財産差押をすると云ふ樣な、斯りや妙な話でございますが……、逃げる味方にひき連れられ、必ならずも酒井左衛門尉忠次、すで〳〵と麓の方へ逃げ退ぞきます……、増目兵庫に於ては逃ぐるを追ふの面白さよと、軍勢に下司を致してドンド〳〵と麓まで追ひかけました、然るに森の木蔭に伏勢を致しました徳川家康は、そりや此の時なりと下司をかけました事ゆへ、二千五百の同勢の内、柳原小平次康政、本多平八郎忠勝共に五百餘人の兵を率ひて、増目の同勢が後の方より攻めかゝりました、之れを見るより酒

井左衛門尉忠次、斯破や加勢の人數が出でたるなり、かつ取り圍んで塵しにせよと大音揚げて呼ばゝりながら、ドッと酒井の同勢が取つて返しましたる事ゆへ、中に挾まつて挾撃にされた増目の同勢、必死と相成りし大手の門へ引返さうとする所へ白地に黑き三葉葵の紋を染め出したる旗、金半月の紋附いたる幟を押樹てまして、一千餘人の同勢が手筒山大手の門へさして攻め登りました、増目兵庫の味方は此處一生懸命にふせぐと雖も、徳川方に有名な大久保、或は本多の一族が吾れも〳〵と大手を望んで攻めかゝりました事ゆへ、遂に大手を破られましたかゝりました事ゆへ、遂に酒井柳原の同勢、酒井の同勢がきそいつき、増目兵庫は討死を遂げました……、大手は徳川の爲に破られましたから、追々敗兵が搦手出口へ逃げ込んで參り、○「恐

れながら御註進申しあげます、大手の搦目兵庫さまは城を開いてうつて出られました事故、賊の計畧におちいり、早や大手は破られましてございます」と註進なしたる時に、玄番景方は、憤然と致していきどうりました、景方「ヤア兵庫、勇氣にはやつて遲れを取つたりとやな、最早大手は破れしとあれば、吾れ此處にあつて何にかはせん、いでや織田の同勢一當て當てゝ呉れすばある可からず」と味方を見返りますと、千二百人許り、大手では大勢遣られました、夫れゆへ玄蕃之正景方に於ては、此の上からは大將自身と討つて出でんものと覺悟を定めますと、千二百人許りの同勢、チリ〳〵バラ〳〵と相成つて思ひ〳〵に逃げ行く樣子でございます、逃げる味方に目をかけず逃げ餘つた物共三百餘人を從がへ、馬の前にまん丸に備へを立て直しました、鬼と異名を取つた玄蕃之正景方、搦手口の門を八文字に

開いて置いて、ドッと許りに押出しました、見やる所の先手は何にしろ木下藤吉郎秀吉、いとも堅固な備へを立てまして、二千餘人の同勢が之れへ對して各々旗幡幟を靡やし、暫らくの間戰爭ひ致して居るうちに、死を極めたる玄蕃の勢ひ當るに難く木下秀吉の軍勢は中を開いて通らせました、併しながら秀吉公一息ついたる朝倉玄蕃を討取らんと、見やる彼方は旌旗馬印を押樹て、ドッと二千餘人の同勢を備へましたのは、之れぞ有名の池田庄三郎信輝の同勢でございます事故、今引返して朝倉玄蕃を討取らんと思ひましたが、見れば大手本丸には三葉葵の紋ついたる旌旗を押樹てゝある、畢竟此の合戰たるや、御主人織田上總之介信長が、淺井朝倉を敵と致しての戰爭でございます然るに德川家に於て當手筒山の城の大手搦手と殘らず乘取られるなれば、何んの面目あつて信長公に對面が出來やう、之れは

是非とも我が一手を以て搦出口を乗取らんければ相成らんが、萬一玄蕃景方の勇氣を以て、御大將の御本陣まで乗込む時は一大事と思ひましたから、秀吉「斯りや虎之助や、汝旌旗馬印を押樹て、勿々御本陣の方へ參つて、玄蕃景方が本陣を荒さんと爲したる時は、初陣の其の方が力を以て玄蕃をうち取れや」と仰せられました、虎之「斯は人多く其の中に、若年の某へ此の大役を仰せつけらるゝ段、有難う存ります……、井上來れ」と言ふが否や、大尺栗毛の馬に、一鞭あてたる事にて、ズン〳〵ズンゾ……と乗出しましたが、何んでズン〳〵ズン……だと言ひますと、何にしろ御身の長は七尺ゆたか、夫れに大尺栗毛と云ふ大馬、お力量は七十五人力、腦上猪首に載いてお出でに爲る所の銀の三尺立烏帽子は其の目方が八貫目、籠手脛當が七貫目鎧の目方が二十六貫目、脊に脊負つて居る幡幟が三貫五百目、

右手の小脇に掻込んだ臥龍丸と銘をつけた槍が十六貫目、其の外魚兼光の一刀、或は差添刀、雌差刀、夫れに鰹節を五本に糒を二升と云ふもの嚢に入れてお持ちに爲ります、大変な目方でございませんか、總計で六十何貫と云ふ、虚言の樣でございますけれども、決して虚言ではございません、七十五人力ある所の虎之助清正でございます、之れ位の目方のものを身体へつけても重ひとは思ひますまい、即ち夫れだけの目方の物を身体につけて居りますから、ズン〳〵ズシン……と言ふので、之れは地響きでございます、此の虎之助が斯んな風で街を歩くと、人家は地震の樣にぐら〳〵搖き始めたと云ふ、まさかさうでもありますまいが……、豪傑井上大九郎を連れまして、信長公の本陣へさして傍見もふらずお出でに爲ります……、此方は秀吉、軍勢を立直したる事にて、黒の御旗、續いて瓢の馬印を押樹てら

れ、此處に織田本陣のおさゑに爲ります、此方は玄蕃之正景方池田庄三郎信輝の同勢二千餘人、四方八方に追ひ散らし、味方をふり反つて見ますれば三百餘人を率いて來つた同勢、此處に大半討死を致し、僅かに殘れるは四五十人と相成りました、併しながら其の身はいまだ一箇所の薄手も負はないと云ふ、一息ついたる事にて彼方を見ますれば雁の紋ついたる幟旗を押樹て丶居りますのが、織田家に於て瓶割鬼柴田と言はれました權六勝家、二千の同勢が控へて居ります、信長公此の時の戰ひには皆二千づつの同勢を持しました、夫れ故一口に二千々々と言つて置きますが……、只今玄蕃に於ては柴田勝家の本陣を望んで押しかゝりました、此處にまた討たるゝ所の同勢三四十人、なれども大將玄蕃之正景方は自身と槍をひねられたる事にて、柴田の同勢へ乘込み、右にうち立て左に突立て、終には猿臂を伸

して人磔をうつ、或は馬の足を以て蹴散らし蹴倒す、馬は放屁を以て吹き飛ばす、そりや當には爲りませんが……、槍をば以て突くと言ゑば大層宜しひが、しばき倒す、左手は人をつかんでは投げ、つかんでは投げ、さしもの柴田の同勢を蛛の子を散らすが如くに八方に追ひ散らしました、柴田權六勝家、斯は殘念なりとあつて、槍を捻つて突懸りましたが、十二三合に致して槍は空天にはね上げられましたから、さしもの柴田も殘念無念と思ゑども仕方は無い、ドン〳〵〳〵己れが同勢が中に逃げ込みました……、然るに此方は柴田の同勢を破つて置いて遙かに樣子を見れば、旌旗幟を押樹て丶、欣然自若と控へましたのが、之れで織田上總介信長の本陣でございますから、玄蕃之正景方、味方を見れば一人と致して附從ふものはございません、玄蕃景方あら嬉しや、味方は大半討死なしたり、彼れ信

長一人を討取つて冥土の土産に彼れの素首提げ呉れん、早や槍は數刻の戰ひにへし折つたものと見ゐると、陣刀をふり被つて置いて、織田の本陣へたつた一人にて乘込みました、鬼玄蕃景方の爲に信長の一命、己に危き所へ、君命に依つて加藤虎之助清正、初陣の手柄に玄蕃景方をうち取ると云ふ、清正が初陣の働きでございますが、チョッと一息續ぎまして次席に委しく辯じ上げます

第七席

兜は亂軍中にふり落しましたものと見ゐます、髮は大被髮と相成り、鎧の大袖小袖はちぎれ〳〵に相成り、卯花鍼の鎧も返る血のために、韓紅と相成りましたが、兩眼をクワッと見開ひて

睨んだ有樣は眼中血走り、人か鬼かと怪び許り、柄の長さは二尺五寸、身の長さは四尺、合して六尺ある所の陣刀を眞向にふり被りました玄蕃之正景方、天地に響く大音を揚げましたが、幾ら大きいからと言つても天地に響く聲はございませんが、斯う申しあげませんければ、人間が強く聞ゐません、之れ言葉の花、文の花と云ふものでございますから、何うも豪傑が其處へ鎧兜をかぶつて居るのに小さくは言ゐません、夫れでございますから、一天高しとうち跨り、さながら赤山の搖ぎ出でたるかと怪しむばかり、大盤石の如き鎧を身につけ、富士山の如き所の兜を戴き、丸太の樣な槍を小脇にかい込み、千石船の樣な鎧をふんばり、と斯う言ふと大き過ぎるやうでございますが、強さうに聞ゐる、夫れが小さく言ふと皆無軍にはなりません、玩弄物の樣な鎧を身につけ、盃の樣な兜を被つて、線香の樣な槍

を小脇にかい込み、今年生れたチンコロの様な馬にうち乗り、歯が屁をたれた様な聲を出して、チョコ〳〵と走り出した と言ふと、夫れでは踏み殺される様になります、夫れゆへ戰爭には大きい事を言ひます、之れは戰爭の徳で……、然らば天地に響けと大音あげたる事にて、

玄蕃「如何にや夫れなるは尾州清洲の城主、織田上総介信長の本陣と見て取つたり、之れは越前一條ヶ谷の城主朝倉左金吾が一族、同苗玄蕃之正景方なり、今日主人左金吾より當所を預かり、僅かの一戰にいみじくも敗軍をいたし、何に面目あつて存ゑ、人に面を現されんや、今や討死と覺悟を極めたり、いでや此の玄蕃景方を討取るものもあらざるか」と呼はりながら、野太刀をふり被つて撞いて、織田が陣中へ乗込み、當るを幸ひ右左に、ザック〳〵と斬り廻る其の當る所勢ひは、天魔鬼神も面を向けべきやうはございません、

の嫌ひなく、ザック〳〵と空竹割或は袈裟斬、車斬と、滅多無上に斬廻りましたから、ワア……と織田の同勢四方八方に逃げ散りました、鬼玄蕃景方、様子を見れば向には、旌旗馬印を押し立てたる其の元に、大將織田上総介信長、金小賀瑠璃紺立の鎧を身に着げられ、金七寶の小手脛當、七枚錏六十四鍵の筋兜、金の鍬形金青龍の前立をなしたるを腦上に戴き、金切割の采配柄を握つて、黒柾の床几に腰うちかけられ控ゑて居ります……馬は最早乗殺して了つたものと見ゑ徒走立と相成つた、玄蕃景方、阿修羅王の荒れたるごとく、大將信長、見參なさんと乗込み來りました、此の時玄蕃景方の横合より、下郎推參、控ゑろ……」と大喝一聲呼はつたものがございますから、玄蕃景方、何物なるかとヅロリと振向きますと、銀の三尺立烏帽子形の立烏帽子、鎧の高紐にはね反し、金小賀萌黄糸縅の鎧に金の金物

一を輝かし、南蠻鐵の七寶續きに相成つた小手脛當を致され、皮足袋皮草鞋、臥龍丸の槍を小脇にかい込んだ、白地に蛇の目の紋を染め出した幡幟いたしたる若武者一人、「御大將に見參なさんと推參なす某こそは、織田上總介信長公の身内にて、さるものゝ虎之助清正なり、今日初陣の功名に汝の息の根止めて呉れべきなり」と臥龍丸の槍を執つて突懸りました、ニッコと笑つた玄蕃景方、玄蕃「ヤァ〳〵汝ごとき見ればまだ乳の香の失せぬ若年者を、鬼と異名を取つた玄蕃景方が相手ではない、うさり居らう……」と睨まれました、虎之助清正大口開いてから〳〵ッとうち笑ひましたが、虎之「何に若年の某より汝の身体を知らざるや、來いや來れ」と槍を捻つて突いて懸る、玄蕃「如何にも望みとあれば冥土の案内をさして呉れ樣」とヒラリと体を變して置

いて一上一下上中下段と凡そ十餘合渡り合ひましたが、勝負は容易につかざる樣子、虎之助清正面倒なりと心得ましたるのか槍を片邊にズン〳〵ズシン……と投げ出したが、大手を開ひたる事にて、虎之「敵や來れ、組んで勝負を決せん」玄蕃「ナ、望む所である」と玄蕃景方、大手を開ひたる事にて、來いや來れと身構えました、虎之助はエイヤムンヅと組みつきましたから、玄蕃景方、金剛力を出してエイヤムンヅと組み合ひましたが、北國隨一の勇士鬼と異名を取つた玄蕃景方でございますから、一挫きと思ひきや押せども引けども動かばこそ、貧亡搖ぎも致しません、エイヤ〳〵と採み合ふ内に、虎之助清正、一生の力量を入れたることにて、エイヤ、〳〵と一振り振るよと見るさしたが、さすが七尺六寸之れある所の玄蕃景方を目よりも高く指しあげました、虎之助尙も力を入れて、搖り搖つて置いて、

片邊を望んでズンブンドウ……と投げ出しました、虎之助大音あげて、大九郎、來れ……」と言ふと、井上大九郎、「心得て候ふなり」と駈け來つたる事にて、大九「動くな、こん畜生」と言つたが、先に清正の力で投げつけられたのでございますから、目の玉が飛び出して血嘔吐を吐いて居る、動く筈はない、大九郎首をスポッ……と斬落しましたが、此の塩梅では何んなものかかゝつても御主人には協はないな」とコッコとうち笑ふた……

……之れが爲にさすがに亂れたちました織田本陣の軍勢も漸くに立歸ります、信長公は之れを御覽に相成りまして、晴れ若者、でかしたり、適晴れ夫れ譽めて遣はせ」、此の時信長の周圍に居るものが、「適晴れ、〳〵、甘茶でカッポレ」と躍り出した、信長「之れ〳〵、怪しからぬ事を言ふな」早速、陣中ではありますが、お目通りをお許しに爲り、秀吉へ對して、信長「秀

吉、其の方能き家來を以て、誠に幸福である、加藤虎之助清正と申すか、また夫れなるは家來井上大九郎と云ふものか、なか〳〵天晴なものである」と信長よりお譽めの言葉を戴きました……、さて此の戰相濟んで後、引續いて金ケ崎、夫れから江州姉川と相爲ります、此の姉川の戰までは、木村又藏、母親の看病をして居たのでございますが、到頭母は病死を遂げられました、其處で母が無い後は一日も早く、長濱へ參つて、清正公に仕ろやうと言ふので、家財道具と言つてはありませんが、鍋釜茶碗の樣なものを賣つて了ひますと、たつた三貫六百しかございませんで、ヤア之れだけでも好いわと云ふので、單衣の穢いのに、煮しめたやうな帶をしめまして木村又藏は、大小を横たゑまして、麻風呂敷に三貫六百の錢を包みまして、夫れを背負ひまして長濱の城下へ來つて、加藤さまのお小屋はと言ふと、只

今御當所のお殿様はお小性の加藤さまを始め皆さんをお伴れに相成り、江州姉川に於て合戰の眞最中と云ふ、斯奴を聞いて木村又藏は、「あゝ成程姉川の合戰か、夫れじや一つ姉川へ行つてお目通りを仕様、併し待てよ、己れが斯んな風で行つたら御主人清正公にお目通りをするのに、何程武士は身態は構はんと言ひながら耻になる、之れは一つ鎧兜に身を堅めて、槍の一本でも持て而して陣中へ罷り出やう」と考へましたから、之れから閼屋町の方へテク〳〵道つて來ました、モウ戰爭のある折から でございますから、閼屋町は鎧屋許りでございます、店には鎧兜や槍、雜刀をならべ立てゝございます、又藏「あゝ亭主、許せよ」亭主「へイおかけ下さいませ」又藏「あゝ亭主、向ふの鎧は好いな」亭主「斯りや銀小實の鎧でございまして、なか〳〵好いのでございます、又藏「小手脛當はあるか」、亭主「へイ銀の七寶嶺き

でございます」又藏「兜は……」亭主「へイ同じく銀で以て、桃實形でございます」又藏「成程、好い鎧だな、其れに槍はあるか」亭主「へイ槍は三間柄大身の槍でございまして」又藏「フウン、幾らだ、亭主「へエ……お安くいたしまして、懸引のない所、九十五両でございます」又藏「フウン、鎧兜も好いが値も好いな、何うだチッとまからんか」亭主「へエ……、何程位でございます」又藏「三貫六百だ」亭主「へエ……、旦那は三貫六百だけ負けろと仰しやいますので」又藏「イヤ三貫六百に負けろと言ふだ」亭主「へエ……、只だの三貫六百で……」亭主は呆れて了ひました、亭主「旦那、戯談仰しやつて」又藏「戯談でない、眞劍だ」亭主「眞劍……、へエ……、いけません」又藏「負からんか」亭主「負かりません、三貫六百なれば唯だ上げる樣なものでございまする」又藏「夫れじや止さう、左樣なら」亭主「へイ左樣なら」又藏表へ

出まして、また五六間歩いては尋ねますが、三貫六百の鎧は何處へ行つてもございませんわい、　又藏「お前の内に三貫六百の鎧はないか」　鎧屋「玩弄物の鎧でないとありません」　又藏「無いか」　又藏表へ出まして考えました、　兎ても三貫六百では鎧や兜は手に這入らん。と言つて此の風ではいかれん、よし〳〵鎧の着逃げをして遣らう、鎧の着逃げをして行つて戰場で扳群の手柄を現はさう、さすれば御褒美として金子を下さるだらう、其の金子を持て行つて返して遣れば一度は鎧屋も驚くだらうが、後で事が解つて喜ぶだらう、併し鎧屋が後から追駈けられると氣がきかん、追ひかけない樣な主をと探して居ります、丁度橘屋權造と云ふ鎧屋の門へ來まして覗いて見ますと、主人は病氣と見えて、暑い時候だのに袷衣を着まして蒼い顏をしながら、店に坐ばつて居ります、又藏斯奴を見て之れは結構だと表から、

又藏「許せよ、亭主」　權造「入らつしやいませ」　又藏「あゝお前は何うかしたのか、大層蒼い顏をして居るが」　權造「へイ何うも早やこの間から風邪を引きまして、其處へ持病の病氣が起りまして又藏「フウン病氣か、何うだ走れるか」　權造「なか〳〵走る所でございません、家を歩くさへもやう〳〵で、腰が痛んで爲りません」　又藏「うまいな」　權造「何んでございます」　又藏「イヤ此方の事だ、あゝ身共は之れから戰場へ赴くものだが、鎧を一つ求めたいと思ふ」　權造「左樣でございますか、何うかズッと並べてございますから、御覽下さいますやうに」　又藏「あゝ向ふの隅にある鎧は何程だ」　權造「此れは卯の花縅でございまして、此の方で六十五両でございます」　又藏「フウン其の隣のは」　權造「あれは紺糸縅でございまして、此の分で八十両でございます」　又藏「己れは身体が大きいからモウと大きいのは無いか」　權造「ございます、

へエあれにございます銀編透しは如何で……」　又藏「フウン好いな、皮足袋小手脛當はあるか」　權造「ございます」　又藏「フウンさうか、兜はあるか」　權造「ヘイ兜は此の五枚鍬の金鉞形がうつた兜でございます」　又藏「フウン、槍はあるか」　權造「槍は其處にございます、何うやら相手は買ひ相なお客だと思ひましたから橋屋權造が、權造「之れ、お茶を持て來い」　又藏「之れ〳〵亭主、誰れも呼ぶに及ばん」　言ふ内に若い奴は茶を吸んで持て參りました、又藏「槍は之れか」　權造「ヘイ其の握太の槍でございますので何うぞお召しなさつて……之れ、旦那に鎧をお着せ申せ」　又藏「亭主、手傳ふて貰ふに及ばん、鎧を着逃げされるとは思ひませんから、若い者が五六人ドヤ〳〵と出て來ました、○「旦那、お附け申しませう」　又藏「イヤ搆はん、身共一人で好いから……、

就ては之れは金子たから、チョッと預かつて置いて呉れ」と麻風呂敷を出しました、亭主は提げて見ると重ひから、大分あるわいと思ひながら傍の方へ置きました、又藏はスッカリ鎧をつけましたが、又藏「何うだ亭主、お前は何にかい戰場の一番槍に一番首なんて云ふ事を知つて居るか」　權造「ヘイ私も軍隊の行軍は見ましたけれども、一番槍や一番首と云ふものは、まだ一遍も見たことはございません」　又藏「己れが一つ鎧兜を身につけて見せて遣らう」　權造「之れは結搆なことでございます……、之れ丁稚や、憐の吉右衛門さんや德兵衛さんを呼んでお出で、旦那さまが一番槍を見せて下さるからと云つて」　又藏「之れ〳〵亭主餘まり呼んで來るでない、見世物の樣に見せて遣るのでないから」　權造「夫れでも私共二人や三人で見るのは勿体無うございますんで」　云ふ中に又藏、握太の槍を提さげましたが、又藏「餘ま

り前の方へ出て居るな、若いものは成るだけ後の方に居れ、年寄や足の立てんものは前に居つても構はんが、一番槍はそれ槍と云ふことがあつて怪我をするといかんぞ」　權造「ヘエ……私共はそれ矢、外玉と云ふことは聞いて居りますが、それ槍と云ふ事もございますか」　又藏「チョイ〳〵あるな……、そりや好いか斯う云ふ風に遣るんだ、槍を中段に執つて置いて、ヤア〳〵敵も味方も能く承はれ、今日一番槍を入れると云ふものは何の何某と言ゐるやつのなり、雜兵餘類と功を爭ふべからず、いでや吾れと思はんものは見參せよや、と言ふのだ、何うだ亭主」　權造「勇ましいもんでございますな、何うでございます皆さん」　又藏「ヤア一番鎗……」と言ふと又藏バラ〳〵ッと駈け出しましたが一町程行くと横町へまがつてドン〳〵〳〵と姉川へさして駈け出します、所が後に殘つた橘屋權造の若い者は、○「旦那、

一番槍は長うございますな、まだ戻りません」　權造「一番槍だ、夫れ位かゝるだらう、一向歸つて來ませんから、　權造「フウン餘り遲いな、チョイと見てお出で、若い者が表へ出て見ますと姿は見ゑません、見ゑない筈で、姉川へさしてドン〳〵行つて了つて居ります、○「旦那、姿は見ゑませんで、私が考ゑますのにヒョッとすると鎧の着逃げと違ひますか、鎧や兜の代はお貰ひに爲りましたか、　權造「何に貰はない、貰はなくても此の麻風呂敷を頂かつて居る、此の中には三百や五百の金は這入つて居るだらう」　○「夫れじや大丈夫、暫らくすれば戻つて來ませう、また暫らく待ちましたが一向に歸りませんから、○「旦那、餘まり遲いじやございませんか、チョイと其の麻風呂敷を改めて御覽」　權造「夫れじやチョイと改めて見ませうか」と風呂敷をあけて見ますと、錢が三貫六百しかございませんから、黙いたの黙か

ないので、病氣で腰が痛いと云つた橘屋權造、びつくり致して立上り三町許り追駈けたのでございますが、モウ間に合ひません……、然るに此方は木村又藏、姉川へ來つて見れば、今や戰爭の眞最中、而かも網島瑞傳坊の爲に織田の本陣危く爲つて居る所でございますから、又藏乘込來つて網島瑞傳坊を討取り、此處に加藤虎之助清正と主從の固めをいたそうと云ふ、いよいよ天正の八年加藤虎之助、豐島河原越水に於て、一向宗有名の根來山小密茶をば討取るのではない、押潰すと云ふ、清正二度目の手柄のお話でございます

第八席

三、姉川原の戰でございます、之れは太閤記の内にも名高い戰

爭でございます、此の戰爭の時に名を後世に留めたものも澤山ございますが、橘屋權造を欺いて鎧兜の着逃げ夫れに槍の持逃げと隨分念の入つた木村又藏でございます、尤も丸々損をかけたのではございません、八十何兩幾程と云ふ大金の内に、三貫八百の錢を置いて來たのでございますから、併し斯う云ふ事は、元龜天正の戰爭でなくても、今を去る事三十六七年前、王政維新の際に德川が歩兵の徵集を遊ばした時でございます、關西は知らず關東江戸表は、何れの商人も商賣休みと云ふ有樣でありました、何にがさて御旗本は鳥羽伏見の戰に、敗軍と相成つて俄にかり催したと云ふ軍勢でございますから、今まで見苦しき賤業を致して居りましたもの、夫れはモウ職人であるの、或は駕籠擔人足、苦しきのは放火、掏摸の樣なものまでも、皆軍人と相成つたのでございますから、江戸市中を暴れ歩きました、

夫れもたゞ物を持て行つて了ふから辛い、其の時に江戸市中の年寄共は相談に及んで、町奉行所へ願つて出でました、其處で無錢で物を持來る事は、罷りならんと云ふ事に爲りました、すると錢さえ置けば好いと云ふので、奴等は價値の一分も致す物を天保錢の一枚か二枚置いて持て行つ了ふ、遣らんと言へば踏み倒す跳倒す、甚しき奴は抜刀に及ぶ、夫れも偶々一人や二人で無い、日に何十人となく來る者でございますから、夫れで大抵な小商人は表を閉めまして商賣休みと云ふ、實に何うも憐れ無樣な事でございました、して見ますれば又藏が遣つたなどは斯りや錢を拂はんと云ふのでは無い、御主人清正公にお目通りを致し、戰功を現して置いて、お手當の金子を戴いたら持て行つて返さうと云ふ、泥棒は返さうと云ふ氣は無い、只で持て行かうと云ふ何方にしても宜しい事はございません……、さて木

村又藏は、二間に餘る大身の槍を擔げて置いて、ドンド〳〵ドンドと乘込んで參りました姉川原、小手を拂つて又藏覗ひ見れば、主人と頼む清正公の即ち味方織田の一手は、淺井朝倉の軍と縱横に入り亂れ、悍馬は南北に走せちがひ、倒れたかと思へば忽ち起き、起きてはまた倒る、何方が敵や味方やら、砂煙はゝん〳〵と致して立昇る、一天は闇んで闇夜の如く、互ひにあげる所の敵の聲、返響に響いて天地も崩るゝかと思はれる、今又藏が見る所へ、ワア……と追討に參りましたのは、織田上總介信長公の組下で、彼の有名な森蘭丸、二男森力丸の父上に當りました森三左衛門可成の同勢でございます、其處へ淺井朝倉の加勢の爲にとあつて、一向宗門の本山攝津東成郡石山龍國山本願寺より致して、御味方の爲に參陣を致した網島の瑞傳坊が同勢凡そ二千餘人を引連れ、坊主頭に鉢卷を致しました身輕な

扮装にて、六尺許りの鐵棒をうち振りまして、さすがの森三左衛門の同勢を粉微塵にうちくだいた、斯う云ふ事がありますから、信長は大層一向宗を憎みました、尤も石山本願寺の戰爭と云ふものは一向宗を憎んでゞはない、自分の御居城にしたいから、石山を望んだ譯でございますが……、今網島瑞傳坊は南無妙法蓮華經と書いたる旗を押立てましたる事にて、森の同勢をさん〳〵にうち減し、今は三左衛門可成聲をからす許りに下司なすと雖も、兎ても備へが纏まりません、右往左往に追ひ散らされる、此の時森三左衛門の同勢は、織田上總介信長公の將棊備ゐ、之れは御旗前の所の備ゐでございますから、森の同勢を追ひ散らして了ゐば、直ぐ信長公の本陣でございます、夫れゆへ網島瑞傳坊は此の本陣へさして乘込みました、之れを見ましたる木村又藏、今は御主人清正公の居する所の、陣所へ伺ひお

回り或して居る場合でないと心得たるか、物をも言はずに網島瑞傳坊の二千餘人の同勢が、勝に誇つて森三左衛門の同勢が逃ぐるを追ふの面白やと、思ひ〳〵に追討或は生捕、分捕を致して功名手柄を思ひの儘に勝ち誇つて居る横合から、槍をひねつて乘込みましたが、前回に述べましたる通り、斯る豪傑、槍で突いては居ない、槍を振り被つて置いてしばき倒すんだ、數多の軍勢の其の中を前後左右のきらひもなく、横一文字に片端からしばき倒す其の勢ひ、暴れ方と云ふものは、人間業とは見ゐない許り、されども槍で突いて居つた奴では、何分目に餘る二千の大勢な、ふまけに勝に誇つて居るのだ、所が又藏の槍は槍の穂先と同じ鐵が、石突の所まで、ズウ……と通つて居るのでございますから、目方のついて居る二間の槍だ、其奴を以て又藏は何も烈しくガラ〳〵、ペッチャペチャとしばき潰した、

ワア……と云ふと今までの勇氣は何處ゐやら、忽ちの間に網島瑞傳坊の同勢は、人なだれをついて崩れる樣子でございます、之れを見たる所の瑞傳坊は、面憎き所の端武者の振舞、彼れら取らざる時には、我が備ゐは經まるまじ、馬上ながら勝負に及んで遣らうと、馬をば押出した、腰の加減を以てカッコヨウシに乘据ゑ、トッ〳〵と只だ一人、又藏重勝の所へ乘据ゑたが、瑞傳「如何に夫れなる所の雜兵、何奴なるか知らざれども、斯く言ふ網島瑞傳坊の同勢に、狼籍いたす所の振舞奇怪至極なり、いで此の棒を食つて往生しろ……」と先は八角に相成り、手元は丸く致し疣々の付きましたる目方十三四貫もある鐵棒を振りかぶつた、其の昔武藏坊辨慶も斯くやと許り思はれまするのは、身の長六尺餘かの大入道、身には黑糸絨の鎧に南蠻鐵の編透しと爲つたる籠手脛當を致され、栗毛の大馬に青貝つい

たる鞍を置き、白縮緬の手綱を鞍の山形に通して、己れの腰に結ばれました……、微笑を含んだ木村又藏重勝、又藏「汝は此の手の大將なるか、斯つて提げ難き坊主首なれども、私が汝の素首を申受くるなり」と槍の中段を執つて身構ゐました、暫らくの間は互に氣合を計つて居りましたが、瑞傳いらつてイヱヤ〳〵、ブウン……、風を生じてうち込んで參つた、体を開ひて置いて又藏、槍を捻つて突懸れば、馬をば乘違ゐて置いて、又もやうち込んで參る際みに、憐れや又藏の持つたる槍、ハッシと許り鐵棒にぶち當てられた、さすがの又藏も思はぬ不覺に、槍をば其の場にうち落しました、又藏斯は殘念なと、大手を開いて、又藏「サア來い坊主」サア來い坊主と大手を開いたのは、組んで勝負を仕樣と云ふのでは無い、斯んな鐵棒を持て居る奴に、槍で向つた所が兎ても協はん、また人の持て居るものは能

く見るものでございますから、わけて瑞傳坊の持て居る鐵棒は、人をぶち殺すのに好都合の道具だから、斯奴を取つて之れでぶち殺さうと云ふ量見でございます、又藏夫れでございますから、大手を開いて身構へた、瑞傳は猪口才なる所の曲物と、再びうち込み來つた、又藏ヒラリと体を變じて置いて、ヤッと云ふと棒の先に手をかけたが、斯りや鐵棒は損でございます、刀の樣なものでありましたら、ビュウと斬込む、すかを食つて了つたて思へば直ぐに振り被ると云ふ事が出來ますが、目方十三四貫目もあらうと云ふ鐵棒、なか〳〵重い、其奴がブウン……向ふを望んでうち込む、先方の身体にブチメと當れば具合が好いが、ヒラリと飛退かれてスカタンをいつたんでございますから、己れの力が餘つて了ふ、斯奴を紐に振りあげ樣と云ふのはチと容易な譯では無い……、其の儘又藏はエイヤア〳〵

と諸手をかけた、取られて爲らんと瑞傳は其奴は曳かうとする又藏は、又藏「此の畜生、サアモッ渡されねえぞ、よこせ、サア出せ」とエイヤア〳〵と更く、さすがの瑞傳坊も今は又藏の力に協はないと見あて、馬の脊中に龜の甲の樣にベタリと爲つて了つて、左の手は放して居るが、右の手だけは矢張鐵棒を攫んで離さない、之れはなせだと云ふと瑞傳坊、鐵棒を放して置いて馬の頭を立直し、逃げたいのは山々だが、鐵棒の手元には丸い鐵がある、其の鐵に白の革革が附いて居る、其の革革を手首に括り着げて置く、何せだと言ふと何分重いものでございますから、離れん樣に括つてあるので、併し今に爲つて見ると、斯奴を解かなければ向ふに渡す事が出來ません、まさか解いて遣るから待つて呉れろと言へす、敵味方が互に見て居る中だ、瑞傳坊斯うなると始末にいかない、又藏重勝も夫れ位な事は知つて

居るんでございますが、今まで何十人と無く槍玉にあげたる上へ今また大敵瑞傳坊の、鐵棒を取らうと云ふのでございますから、忘れて了つたものと見ゐて、又藏「ヤイこん畜生、奴の樣なしみつたれ坊主は見た事がない」しみたれでなくても離す事が出來ん、又藏「何うしても離さないな、離さなければ好いわ」、とエイヤッと一勢の力を出して曳いた、驛むべし瑞傳坊鞍を返するズッデンドウと落馬に及びましたな、又藏「野郎、まだ離さないなー」と云ふと瑞傳坊の胸の所へ足を踏みかけて置いて、エイヤッと云ふて引張つた、其の時白の韋革が切れゝば宜かつたが、切れなかつた瑞傳坊の右の腕がボコリと云ふと抜けて了つた、何うやら斯奴は的に爲りませんが……、何にしろ又藏の力でございますから、其の鐵棒を取るが否や瑞傳を目懸けてガンと敲きすると目の玉ポン〳〵と云ふと飛び出した、其處へ烏が飛んで

來てコッ〳〵と拾ふて食つたが其處は當に爲りませんが、其の鐵棒をふり被つて置いて又藏、唯ださゝ崩れてあつた瑞傳坊の同勢の中へ面もふらず割つて入り、またもや大勢の人をば滅多無上にうちなやまして居りまする、然るに此の体たらくを御覽に相成りました織田上總介信長、信長「敵か味方か不意に横合より、現はれ出でたる彼れなる武者、何物なるか姓名を尋ねて參れ」と御下司が下りましたから、池田小作と云ふお使番が、承りましたと鹿毛なる馬に一鞭を加ゐて、ハイ〳〵〳〵と馬をあをつて乘出して參りましたが、小作「ヤア〳〵只今網島瑞傳坊を討取り尚も烈しく敵をなやます所の大豪傑、御大將の仰せに候ふなり何人の麾下に候ふや、姓名の程をば承りたう存ず」又藏「アイヤそれがしことは當時尾州清洲の城主、織田上總介信長公の家來、木下藤吉郎秀吉の家來、加藤虎之助の家來、木村又藏

と申するものなり」　小作「恐ろしくやゝこしい何の家來だか解らなく爲つて了ふ、今一度承はりたい」　又藏も立つてヲッとして言ふので無い、逃げる弱兵をばうち据ゑ、ぶち殺しながら、又藏が言ふのでございますから、エイ面倒臭いと思つたか、又藏吾れこそは尾州清洲の主に致して、今や天下の豪傑と人に言はれて、朝日の昇るが如き勢のある、織田上總介信長公の臣下に致して江州長濱城の探題、木下藤吉郎秀吉どの、家來に致してさる者ありと聞ゐを取つたる大豪傑、加藤虎之助藤原清正の家來、姓は源氏の嫡流に致して、長らく浪人致してあつたる新參召抱ゐと相成つたる木村又藏重勝と申す」　小作「何解らなく爲つて了つた、左樣長らく名乘らずに、モウチッと簡畧に、解り易く手早く仰せを願ひたい」　又藏「夫れなら、織田信長公秀吉加虎木又だ」　小作「何解らない」　其の内に網島瑞傳坊の同勢は、森三左衛

門の一手が引返して參つて、之れを追ひ散して了ひました、又藏獲る所の首三十餘級と云ふ、中で以て甲冑の立派な奴を分捕りしましたが、さうは持ちきれませんから、一番上等の奴を分捕致しました、又藏ニッコリ笑ふて有難い〳〵、一戰爭あれば借金は直きに返せると喜びましたが、此處に信長公の陣中へ來つて、主人虎之助どのに對面を致し、久々井上大九郎にも對面を致す、尙また陣中にて、信長公にもお面謁を仰せつけに相成りました、斯る次第でございますから、加藤の十虎二十四將の内にも、木村又藏と云ふ名が織田信長公にも早う知られて木村井上と一口に言はれるのは、此の姉川の勳功に寄るのでございます、さて加藤清正、二度目のお手柄と云ふのが、豐島河原に根來の小密茶を討取るより愈〳〵御感狀の一條に相成りますが、チョッと一服致しまして……

第九席

エ、お話が或は前後矛盾ところもございませうが、何分此の清正と云ふ人は秀吉公に伴なひまして勳功のある人でございます夫れでございますから、マア秀吉が刺身であつて見れば清正は山葵の樣な、秀吉あつての清正、清正あつての秀吉と云ふ樣な譯でございます、併し清正の戰功ある極く面白い所を擇びまして、申しあげます積りでございます……、織田上總介信長が、幕下の諸將をお集めに相成り、日本名城の地は、何處にありやと云つてお尋ねに相成りました時に、織田家の軍師と呼はれた平手監物時秀、此の人餘り太閤記では譽めませんが、尤も秀吉と云ひ、或は光秀と云ふ天晴れな器量人がありましたから、平手の軍學も餘り世に現れませんが、なか〳〵大したお方であり ました、卽ち日本三忠臣の一人で、家康公が後に姉川へ對して「嗚呼忠臣平手監物時秀墓」と題して石碑を立てました、今一つは秀吉公がお遊びに相成つた、「嗚呼忠臣中川瀨兵衛墓」と云ふ、今一つは水戸の黃門光圀卿がお建てに相成つた「嗚呼忠臣楠氏墓」之れを日本三忠臣と云ふ、嗚呼忠臣と言へばモウ之れが極度でございます、何んでも嗚呼と云ふ二字は、モウ言葉で何んとも言へない、時に嗚呼と云ふのでございます、彼の梅毒でも出來て居る者が浴湯へ這入つて、あゝ好い心持だと云ふ、また講談速記の本を讀んで、愈々總大尾と爲つた時に、嗚呼面白かつかと云ふ、之れ卽ち極度でございます……、其の平手監物が進み出でましたが、監物「御尋ねにさうらふ、日本六十餘州廣しと雖も、名城となる可きの地は僅々三ケ所より之れ無く候

ふ」　信長「ヲヽ、時秀、其の三ヶ所とは何處如何なる所であるか」　監物「御意にて候ふなり、駿河の國久能山と言ひる山あり、之れぞ日本無雙の要害にして名城の地にございまする」　信長「フッン……、駿河の久能山……如何なる譯にて名城と云ふや」　監物「御意に候ふなり、其の名城と云ふは一方は山を控ゐ一方に海あり一方に河あり平地陸續と致したる地にあらざれば、名城と言ひ難く候ふなり」　信長「併し駿河の久能山にては余の心に適せず其の外二ヶ所は何れにあるや」　監物「西國にては周防の國山口でございまする」　信長「周防山口は餘り遠土なり、今一ヶ所は何れにあるや」　監物「されば之れぞ五畿内攝津の國東成郡石山の地こそ日本無雙の要害の地にございまする」　信長「石山には近頃何人が住居を致す」　監物「されば一向宗門の本山龍國山本願寺顯如上人の祀りある寺でございまする」　信長「何に一向宗門の本山顯如上

人の寺とな、出家は三界無庵、樹下石上を宿とする者なり、世は今應仁の大亂後百年の今日なるに、尚天下は麻の如くに亂れ姦賊蜂の如くに起り、畏れ多くも一天萬乘の君に貢献を贈り奉るものも無き今の有樣、吾れ禁裡を守護するの役目あり、早々龍國山本願寺に使者を送り、石山の地を余が申受け呉れん、其の上からは城を築いて我が居城致さん、ヤア〳〵佐渡守、汝本願寺へ參つて信長が所望の地なるに依て石山を明渡せと申せ、使者申し付くるであらう」　織田の殿下の大名にて、林佐渡守が仰せを蒙りまして、之れから攝津東成郡、當大阪の石山へ登山を致しました、其處で使者の口上を述べる、所がなか〳〵何うも早や本願寺の方の勢ひと云ふ者は宏大なものでございます、何にしろ龍國山本願寺と云ふのは、皇帝から致して賜はつた土地、夫れのみならず、先祖親鸞上人から代々血脉を以て、世を

續き來つて居やうと云ふのでございますから、寺侍寺家老と云ひながら下禄次部、下禄出羽守を始めと致して、各々萬石以上の大身でございます……、此處に其の石山の起原から、親鸞上人の功力に依て、龍國山本願寺を賜はりたる地だに依り明渡す事相成らざる次第を悉く下禄治部と云ふ家老から、林佐渡守に述べるのでございます、併し之れは石山軍記に爲りますから、畧致しますが……、林佐渡守立歸つて信長に、本願寺は石山の地を明渡す事出來ないと申しあげました、「然らば軍勢催促に及び早々石山の坊主共を追拂つて了へ、此の時柴田或は佐久間、池田、森始めと致して老臣の方々が御意見を申しあげたのでございますが、信長は言ひ出したら聞かない、恐ろしい強情な人でございます、能く信長と家康と秀吉、此の三人の氣象を諷した狂歌がございます、郭公鳥で以て狂歌をお讀みに相成つた時に

氣象が至然と現れる、信長は言ひ出したら強情我慢の大將でございますから、「啼かずんば殺して了へ杜鵑」と、云ふ、即ち鳴かぬ樣な杜鵑なら伺つて益がないから殺して了へと云ふ氣象でございます、夫れに引換へて秀吉は、「啼かずとも鳴かして見せう時鳥」と云ふ、鳴かぬ郭公鳥でも已れの工風で啼かして見やう、無理からでも啼かさうと云ふので、さうかと思ふと家康は、一番終に天下を取つた位、時節の來るのを待つて居やうと云ふ落付いた人でございます、「啼かずんば鳴くまで待とう不如歸」啼かなければ何れ鳴く時があるだらう、夫れまで待つて居やうと云ふ、之れが何うも一番して取りました、尤も之れには浮れ節も這入つて居ります、浮れ節のは、「啼かずんば鳥屋に賣つて錢にしう」と云ふ、成程斯奴は當世向で宜しうございませう、誰れが呼んだものか知りませんが……、其の位の信長

でございますから、如何に各々の者が御意見するとも御用ひがございません……、然るに石山の方では、信長が軍勢催促に及んで攻めかゝると云ふのを承はり、本山大切、お上人様のお身の上と五畿内は申すに及ばず、諸國から致して佛法歸依の老若男女は、吾れも〳〵と石山へ登山を致します、サア大層なものでございまして、言ふまでもなく今日の大谷派本願寺でも上人が檀家の者に向つて、一言お頼みに相成ると、立所に百萬圓の金子が集らうと云ふ、好い株を親鸞上人は拵へて置いたものでございます、寒錢箱の中でも五十圓、百圓と云ふ金が這入つて居やうと云ふ、何處の何某か解らないが寒錢箱の中へ入れて行つて了ふ、夫れでござるに依つて、集る所の人數は三十有餘萬人之れには小さな大名もあれば、武士、浪人、豪士が居ります、商人、職人は軍用米を寄進に及ぼうと云ふので持て參ります、

また中國の三大將と言はれる毛利、吉川、小早川の三家よりは十萬俵の米をば石山へ送らうと云ふ大層な事でございます、然るに此の時石山方で以て高名なのは鈴木飛彈守重幸と云ふ、之れは紀州新宮に居りまして、代々新宮の領分を持て、所謂豪士みたいな者でございます、然るに恐ろしも佛法歸依にて幼年の頃おひより一向宗の檀頭と相成りました、所が或る夜の事重幸天文に依て、石山に戰爭が起るのを悟りました……、然るに此方はまた石山の方では、集りましたる所の武士分の人々が評定を致しましたが、大將は何にしろ顯如上人にて、念佛や阿彌陀經三部經と云ふ樣なものは詳うございますが、武藝軍學の道は誠に薄い、其處で一人然る可き軍師をと云ふと、紀の國雜賀の住人鈴木孫市、之れは慶長五年關ヶ原の戰爭に有名な雜賀孫市の親でございます、此の人の甥に當つて居るのが、新宮の鈴木

飛彈守重幸でございます、夫れ故鈴本孫市が「此の鈴木重幸をお招きに相成り軍師と致せば、未だ若年なれども六韜三畧を諳んじ勝つ事を帷幄の内にめぐらさうと云ふ、ならう事なれば此の者をお招きに相成れば如何でございませう」と言ふと、半分は重幸の智識ある事を知つて居りますが半分は知りません、併し半分の者に彼の人は、豪いと知られて居れば皆に知られて居るのも同様でございます、其處で顯如上人がお頼みの手紙を書いたのでございます、其の意味は何う云ふのかと云ひますと、何うかお前も一向宗の棟頭じやに依て、今度は私が織田信長と云ふ佛法嫌いな兄公と喧嘩を始めるから、就ては私は坊主だ、法談や説教は遣るが、戰爭の事は全く知らんから、何うか來て一番軍師と爲り、加勢と爲つて貰ひたいと云ふ、斯う云ふ手紙を書いて之れを孫市にお渡しに爲りました、其の時顯

如上人よりお盃を戴きまして喜び勇んで出立に及びました、新宮に來まして飛彈守重幸に一部始終を話しましたから、重幸に於きましては心好く承知に及びまして、其處で軍師と云ふ大役を仰せ付けられ、上人に變つて軍勢の懸引をする事に爲りました、夫れで織田信長は、軍勢を率て石山攻めと押出して參らうと爲りますが、サア行きません、一器量ある所の人々は、皆戰場の御伴をば御辭退申しあげる、信長も毎々大軍を石山に許り攻めて居る譯には行きませんから、美濃攻或は江州、或は北國と諸方に合戰を致す、其の暇間を見れば軍勢を出して、十有餘年の間攻めるといへども信長が軍勢を出す度毎に、信長の軍は悉く敗れます、之れと云ふのは鈴木飛彈守重幸の計事と紀の國根來山の出家にて名も小雑茶坊と云ふ、身の長六尺八寸ある天下無雙の荒法師、右二人の爲に惱まされたのでございます、然

るに年月遷り變つて天正七年と相成り中國攻にお出でに爲つて居る秀吉公が、時も正月の御年始の爲に來つて承はつて見れば石山を攻めてお出でに爲る樣子、此處に秀吉公が御意見に及んだがお用ひなひ所より據ろなく秀吉公が石山攻めにお出でに爲る愈々加藤清正が武勇のお話でございます

第十席

天正の五年に秀吉公が中國探題職と相成つて中國攻を致しましたのは、之れは一番何うも秀吉公の見込が當りました、或る太閤記に依りますと秀吉を譽めたいが爲に他の者を恐ろしく惡くして、光秀の如き人は實に甚く攻擊してございますが、總て其の昔の作者に依つて一色ではございませんから年號の相違、或は其の人數の評論に就ては或は譽め或は之れをうち色々ございます、元來光秀と秀吉は信長と云ふ人が、固より天下を治めて孫末代まで之れを相續させる程の福德器量のあつた人では無いと云ふ、夫れを見拔いて置いて信長に隨身を致しました、之れ位な器量人でございますから、其の頃おひ參州岡崎の城主、德川藏人家康は家柄も宜しい、夫れに何せ此の家康の所へ身を寄せない、家康と云ふ人は、人をなつける力量もあり、天下を治める力もある、之れに隨身しては唯た人に遣はれる位でございますから、光秀でも秀吉でも、却つて信長の樣な猛勇な人に身を寄せる樣な事に爲つたのでございます、併し天下は廻り持でございます、信長が强情我慢で以て天下を大半をきり平げ、秀吉が後に廻つて隅々までも攻め惱まし、天下を平かにして了つた、慶長の十九年卽ち元和元年に其奴を德川が貰つて、十五代

の樂を見やうと云ふ、能く繪双紙屋に繪にある通りでございます、信長が光秀が一生懸命に餅を搗いて居ると、秀吉は褌がけに相成つて頬りと小餅を拵へたり或は豆の粉なんぞ、搔き廻して居る、蒲團の上に坐つて前に茶道具を控へて皆が拵へて呉れた餅をムシヤ〳〵食べて居るのが家康でございます、うまい所を繪に書きました……、

さて秀吉が中國攻めに行くのは自分がモウ中國へ行けば、必ず其の後で以て光秀が信長を憎んで殺さうとする、何せ殺さうとするなれば、光秀位な器量人、諸方に戰功があるから實は信長が恐い、恐いから信長は光秀を殺さうとする、光秀は器量があるから、機先を制して信長を討つに定つて居る、して見れば光秀はかりそめにも主殺しの大罪人であるから、自分が主人の吊合戰をする、光秀を討取るに於ては後は恐るゝに足らざる織田の羅下じやと云ふ事に氣が附きました

此處が秀吉の豪い所でございませう……、所が秀吉は智計を旋らして始終中國を攻めますが、なか〳〵中國十一州容易でございません、時も天正の七年と相成り、正月に秀吉は旗下の者を引連れまして年始と致して、久々上京を仕やうと思ひました、然るに信長は石山本願寺を攻めて居る最中でございますから、信長の陣中へ來つて御目通りを願ひあげました、此の時にはモウ信長は彈正忠から右大臣に爲らうと云ふ、されば其の勢は朝日の向ふが如く、天魔鬼神も面を向けべき樣はございません、

早速お目通りへ引出された時に秀吉が、秀吉「早速お目通り仰せ付けられ秀吉身に取り有難く存じ奉ります、上にも麗しき御尊顏を拜し先づ一陽來復千里同風、秀吉恐惶申しあげ奉ります」信長は氣にいりの秀吉でございますから、何日でも顏を見れば お笑ひに爲ります、

尤も秀吉の顏を見れば誰れでも笑ひます、

其の顔猿に似たる所から、猿面冠者と綽名を取つた位でございます、併し或る博士のお説には、秀吉の顔は猿に似て居らん、狗に似て居るから、犬面と云ふ方が好いと仰しやいましたが、何方にしても嬉しい事は無い、キャッ〳〵かワン〳〵の違ひだけで、併し異相の人物は皆名を揚げ家を興すものでございます彼の唐土の劉備字は玄徳と云ふ、此のお方は其の顔馬に似たりと云ふ、顔の長さが一尺八寸あつた、丸で亞剌比亞馬が行燈をくわえた様な顔だ、顔に許り黒子が八十二あつて耳は肩に垂れたと云ふ、恐ろしく厄介な顔だ、併し遂には關羽、張飛と云ふものを得、尚また諸葛孔明と云ふ大軍師を得て、漢室を興して天子と爲つたと云ふ大層な豪傑でございますが……、信長、秀吉の顔を見られて微笑を含んだが、信長「其の方にも恙なき樣子、余は滿足に思ふのである、追々齎らす註進には、其の方智勇を

以て中國も大半攻め取つたりとの事、大儀に存ずる」之れから御盃を下し置かれます、此の時秀吉が、秀吉「長れながら我が君實は故參の元老方より屢々お諫めあるとの事此の秀吉も承り及ぶところ、君には今御居城を築かんが爲に、斯く一個宗の本山顯如上人を敵と致され、石山をば征伐あそばし居られるとの由何故斯く石山を惜ませ給ふや、只今は日本六十餘州を斬りなびき日本の武將と仰がれ給ふ上、日本國中の士農工商皆君の下風に立たん事を願ひ居ります、されば名城の地も敢て入用之れなく、願はくば石山攻めの儀は御中止遊ばされ、他の逆賊征討の義を御心懸けの程を願はしく存じ奉ります」信長「秀吉、汝の言葉は悉く命中するに依て、今日まで一度も背きしことはあらざれども、石山攻の儀は實其の方の諫言ながら、信長暫つて思ひ止まる事相成らん」秀吉「然らば我が君にはあくまで

當石山を攻め遊ばし、御居城をお築きに爲らんの思召しでございますか」　信長「イヤとよ秀吉、さる望みにては無し、吾れ今日と相成うては引くに引かれぬ場合、今日まで數度の戰ひ一度も我が勝利と爲りし事なく、當石山の軍師、鈴木飛彈守重幸の爲に、我が味方大半を失なひ、かるが故に今日にては討死なしたる者の無念を吊はんが爲に、信長は戰爭を止むる事能くまでも罷りならん」　秀吉「御意に候ふ、然らば秀吉、上が憎ませ給ふところの飛彈守重幸、此の者をば討取り、上の御無念をはらし奉るに依て、當石山本願寺を攻められ、顯如上人を苦しめ給ふ事は御止まりの程を願ひ奉つります」と斯う言つて信長を諫めました、其處で信長は、モウ鈴木飛彈守さを討取つて呉れれば、石山は攻めんと仰しやひました、夫れゆへ秀吉は旅宿へ立歸りまして、宣書と云ふ、所謂決鬪狀みたいなものでございます、之れを書いて加藤虎之助清正に向ひ、秀吉「其の方使者と相成り石山へ罷り越し、飛彈守重幸に對面に及んで、之れなる書面を出し、返答を受取り參るやう」と仰せられました、其處で清正は宣書を懷中と致して、木村井上の兩名を伴れられまして身には麻の上下を着用いたし、質素なる扮裝をいたしまして、石山大手の門口へかゝつて來ました、木村又藏大音を揚げましたが、又藏「ヤァ〳〵當寺を護られる人は何人なるや、之れぞ織田殿の家來、中國探題職羽柴筑前守秀吉の使者と致して、加藤虎之助清正罷り越したり、開門あられて然るべき、尤も用事は鈴木飛彈守重幸どのにあり、早々飛彈どのお出であられるやう宏大なものでございます、何十萬人と云ふ軍勢が籠つて居る本願寺、織田の幕下の人と言へば、殘らず敵と見なされて居るのでございます、大將の顯如上人は理解の分る人、また軍師重幸

は器量人でございますが、併し集まる所の何十萬人と云ふ中には、無智文盲の理解の解らんものも居りませうが」夫れに僅か三人、本來なれば草履取や槍持を伴れて來るのでございますがそんな者は引張つて來ない、只た三人限り、夫れも嚴重に鎧冑でもつけて來るなればまだしも素膚と云ふ……、此方は大手口をば守つて居りました下稜出羽守から、飛彈守へ申しあげました、飛彈守は、重幸「何に織田どのゝ輩下の軍師、彼の有名な羽柴秀吉が吾れに使者を送るとやな、早速對面いたすであらう、隨分叮重に致せ」之れから鎧冑を執りまして待つて居ります、下稜出羽守は門を開きまして見ると、年まだ若き所の武士が、二人の家來を連れて居ります 出羽「之れは〳〵羽柴どのゝ御家來當日使者に見ゑられた加藤どのに候ふか、拙者は當石山の家老下稜出羽に候ふなり、いざ御案内申しあげませう」加藤清正は

木村井の上に向ひ、清正「汝等兩人は之れにて相待ちます樣」さて清正はだん〳〵書院まで這入つて行きます、其の間と云ふものは各々槍、薙刀をひらめかし、さすがは何うも軍師飛彈守の軍配下司が能く屆いて居ります、信長が軍勢を引いて了ゐば百姓は我が家に歸り、職人商人は家に歸りますが、其の間に調練をして居ります、夫れでございますから始めの内こそ軍勢の規律が立ちません、一揆の樣な鹽梅でございましたが、此の頃では何う致して皆立派に爲つて武士同樣に軍勢の調練が能く屆いて居りますから、各々得物を輝かして居る、其の中を見向も遣らず清正は平氣でうち通ります、書院に通つて宣書を渡す、飛彈守重幸も、引くに引かれぬ武士の意氣地、顯如上人にお別れを告げて置いて、豐島河原越水に於ていよ〳〵討死と云ふ、根來の小密茶飛彈守を落さんが爲めに、八尺の極の棒を持て羽柴の

軍勢をなやますと云ふ一條に移りますが、チョッと一息つきまして……

第十一席

宣書を開ひて飛彈守重幸が讀みますと

一、前年より主人信長、當石山を望むの餘り、此處に本願寺と合戰する事數年に渉り、爲に一向宗門の老幼男女、本山の爲とわつて脩羅の巷にさまよふ段、不憫の至りに堪へず、此の度秀吉主人を諫め、以來本願寺と弓矢を爭ふ事を思ひ止まらせん爲に、就ては今日まで朋輩數多討死を遂げたる事、之れ本願寺顯如上人のなす業にあらず、軍師たる鈴木飛彈守どの、即ち御身の爲す仕業なり、故に右の靈魂を慰めんが爲に豐島河原越水に於て、明日早天八千の軍勢一手と爲つて、御身の一手と共に雌雄を決せんと心得る、信長今日にては石山本願寺に怨みなく、其許に怨みあるとの一言に依り、己むなく今日宣書を送るものなり、武門の恥を知らるゝに於ては、豐島河原に出陣之れあるべきものなり

年　月　日

筑前守秀吉

鈴木飛彈守重幸どの

斯う云ふ宣書でございますから、飛彈守重幸もつらひ、之れは自分さへ討死すれば後で石山本願寺を攻めなければ宜しいが、必ず信長が攻めるに定つて居ります、血判狀でさへも違叛する折から、斯んな者は反古にするのは固よりでございます、と云つて今此の戰爭が厭じやと言へば、飛彈守は一命を惜むものとなる、さすれば秀吉から攻めかゝるとなれば何十萬人と云ふ一

豪傑加藤虎之助

向宗門の老若男女は討死をする或は怪我をする、皆本山の爲に死ぬのだから有難いと云ふ樣なもの、心の中では眞から有難がるもの許りはありますまい、彼の說敎なんぞを聞きに行つて居る爺さんや婆さん、高坐の上で以て、生臭坊主が饒舌つて居る寢言を聞いて、お有難い、早く彌陀のお傍へ參りたうございます、あゝお有難いなんて涙を溢して有難がつて居る、夫れが說敎が果てゝ了つて、歸る時に爲ると、「私所の嫁はモウあゝ道樂では協ひません、悴がモウ女房に卷かれて居るものでございますから、私が何んにも言はないと好い氣に爲つてヤア夕も私が歸つて見ると、留守の間に偏鈍二杯を內証で食べて知らぬ顏して居るでありませんか、今私が黑い目をして睨んで居つてさゝ彼の樣な道樂、私が死んだら何んな事をさらすか、夫れを思ふと急には死ねません」說敎を聞いて居た時は、お傍へ早く

行きたいと云ふのにモウ歸る時は何んの事でございますか、斯くまでに僞言多き世の中に、死ぬる許りは誠なりけり」、死にたいと云ふのは、一人もないのでございます……、夫れや之れやを思ひますと飛彈守も引くに引かれぬ場合、重幸「之れは〳〵お使者には御苦勞に存じます、飛彈守も未熟ながら武士の端くれ明日早天に軍勢を引連れまして、豐島河原へ出陣に及びます事故、御歸陣と相成り、羽柴どのにお傳へ下さる樣、お使者御苦勞に存じます」之れから茶菓子を出す、本來なれば酒肴と云ふ所でございますが、寺の事でございますから、茶と菓子でございます、夫れより申し送られる段委細承知に及ぶと云ふ返事を書いて清正に渡しました、清正は別れを告げて旅宿に歸り、秀吉に告げました、其處で其の夜の內に充分に支度をいたし、夜明前より豐島河原へ出陣に及びまして、八千の同勢之れを名

附けて精兵と云ふ、精兵とは大勢の中からよりに撰り抜いた同勢でございまして、牛肉ならロースか、米なら壽計米と云ふ様な一粒よりでございます……、然るに飛彈守重幸に於ては、使者の加藤清正を返した後で、顯如上人の目通りへ出でました、上人を始めと致し集る所の一方の大將分の人々は、如何なる使者であるかと安き心もなく致して、千疊敷の大廣間へ集りました、顯如上人飛彈守の顔を御覽せられて、顯如「之れ如何に重幸織田家に高名なる羽柴筑前守秀吉より、使者を送りしとあるが使者の次第は如何なる義であるか」重幸「ハイ今日使者を送られました次第は、數年の間當石山に軍を向けると雖も、織田信長の戰利なく、まつた當山と戰ふ度ごとに多くの死人怪我人を出すこと實に不憫の至りなり、此の度秀吉、主人信長に諫言を容れる所、信長は今日にては本願寺を憎むにあらず、一向宗押

を惡むにあらず、上人に怨みを懷くにあらず、一意斯く言ふ飛彈守重幸を怨むなり、重幸無くなれば、以來は石山に軍を仕懸けまじとなり、此處に及んで明日早天を相圖と致し、豐島河原越水に於て、秀吉八千の精兵を送られ候ふなり、然らば重幸に於ても武士道の意地、明日は潔よく一戰致して相果つるの考へ最早今生にてのお目通りは之れ限りにて候へば、お暇乞の爲に罷り出で候ふなり……、アイヤ並み居る方々や、重幸は宣書に依て、羽柴秀吉と戰ひ明日無き身と相成るとも、彼の信長は今日の言葉は明日に變る大將なり、亂世の常と致し、親は子を疑ひ子は親を疑ふ習慣、萬一此の重幸が無きを幸ひ、再び當山へ對し上人を苦しむるや解らん、方々御油斷ばし給ふな」上人は重幸の顔を御覽に相成り、さめ〴〵と御涙に暮れ給はれました、顯如「如何に重幸、其の方明日の合戰、思ひ止まる譯に相成が、

らずや、十餘年の其の間、親鸞上人が妙法に依て、斯く石山の地を賜はりたる龍國山本願寺の寺名を恥かしめざるは、其の方が與かつて力ある所なり、其の方明日討死とあつて、今別れを告げるは誠に嘆はし、世にも斯る嘆きのあるものならじ」と聲を籠らして御嘆き遊ばしました、時に重幸が、重幸「おん嘆き給ふな上人、重幸豊島河原に討死いたすと雖も、上人の御身、本願寺の無事を必ず共にお力と相成り、後日信長が上人につらく當りし其の時は、必ず法力を以て信長の素首をうち落すで候ふなり」斯く言つたのでございますが此の言葉をくみ分ける者は無かつたのでございます、夫れでございますから重幸は二日の戰ひの内、二日目に至つて雜兵の姿に相成つて、到頭豊島河原を落ちて了ひ、信長が遂に公卿に賄賂を贈つて、勅命と云ふ名を假つて、紀州鷺の森に本願寺を遷しました、其の時京都に於て重幸が信長の隙をねらつたのでございますが……、さて上人と別れを告げました、其の後お盃をば賜はる、所が並み居る僧侶の席から進み出でましたは根來の小密茶、坊主の席を見ますと、青い頭や赤い顏をして居る、丸で西瓜が唐仙を並べた樣でございます……、

小密「アイヤ上人、根來山の小密茶が願ひ奉ります、明日軍師飛彈どのは、豊島河原に於てお戰爭遊ばるゝ御決心、願くば此の小密茶も戰場の御伴を申しつけられたく、斯く言はゞ上人へ不忠に相當るか知らねども、出家にあるまじき此の小密茶が、今日まで織田の軍勢を討つ事數知れず、軍師飛彈どのをば信長が惡むとなら、此の小密茶をも飽くまで憎しと思はん、願くば御伴仰せつけられまするやう」上人お言葉を聞されまして、顯如「いみじくも申したり小密茶、其の力が言葉尤なり、明日重幸と共に出陣致し、重幸を隨分共に救はれよ」

いて鈴木重幸は、重幸「アイヤ、小密茶どの、其の方の實意辱けなけれども、兼て覺悟の此の重幸、其の方如き豪傑をあたら殺すは殘念なり、死は易く生は難し、其の方後に存へ、上人の力と爲られよかし、小密「アイヤ、軍師こそ後に殘つて飽くまで上人の御爲に爲し給へ、小密茶如きものは、たゞ已れの勇を頼み敵を倒す許りなり、若し明日豊島河原越水へ戰場の御供をお許し下し置かれずとなれば、小密茶之れにて切腹致して相果てるなり」此處で人々が重幸どの、小密茶を連れて行かつしやいと云ふ、重幸も小密茶位な傑豪、連れて行きたいのは山々でございますが、詰死と覺悟をきめたるに、小密茶を伴れて行つたと笑はれるのも殘念と我慢を張つて居りましたが、遂に人々の勸めに從ひまして、此處に通宵名殘の酒宴に及ばれなした、さて明烏の三聲曉を告げ渡る時に、遲れて人に笑はれては相成らん

と、鈴木飛彈守重幸は、身には錦襴の卵の花械の鎧を一着に及ばれ、金の笹輪胴の胸金物、夜目にも輝き渡つて見ゐたりける五枚錏の烏帽子形の兜には、南無阿彌陀佛の六字の名號入りたる金の前立を致し、銀編透しの籠手脛當、連錢足毛の逸物に乘鞍置いてうち跨がり、定紋透しと相成つた鎧をふんばり、二間三尺の槍を小脇に搔込みました、其の右脇には、身の長積つて六尺八寸、坊主頭に行者頭巾を押頂き、紺絲織の鎧を一着なし鐵七寶繋ぎと相成つた籠手脛當を附けられ、手元を丸く致して尖で八角に削られてある、所々に鐵の拶輪を嵌めた、樫の木の八尺もあらうと云ふ棒を提げ、武者草鞋を穿きました、さながら武藏坊辨慶と見擬ふ許りなる根來山の小密茶坊が、此處に顯如上人の御筆の跡なる旗、續いて南無阿彌陀佛、南無不可思議如來と書いたる旗三旗をおし立てられ、白地に黑き笹輪胴の旗

三旗、緋地の旗二旗、五色の吹貫、猩々長馬鬣のついた馬印を押立てまして、討死と覚悟をなした鈴木飛彈守が、同勢此處に僅か八百餘人をまん丸に備へて、石山本願寺を後に致して、豐島河原越水を望んで出陣に及びますより、此處に其の名も高き羽柴筑前守秀吉の八千の同勢と、二日の間戰爭に及ぼうと云ふいよ〳〵加藤清正が武勇の一條でございますが、チョッと息を入れまして次席に申しあげませう

第十二席

時は天正の八年正月十八日、石山本願寺顯如上人にお暇を告げまして、上人を始めと致し、下褄出羽守及び其の夜集る所の大勢の人々は、鈴木飛彈守重幸、根來山の小密茶、夫れに從ふ所の面々をば見送る事に相成りました、南無阿彌陀佛の旗、南無不可思議如來と書いた旗、笹輪胴の幟或は馬印を押樹て整々堂々と致して、豐島河原越水をさして出陣に及ばれ、備ゐを長蛇の陣にひきました……、此方は織田家に名高き所の羽柴筑前守秀吉、先手は蜂須賀彦右衛門家政、まん字の紋を染め抜いた幟を押樹て、續いて木村小隼人、其の他御旗本には、加藤、福島、片桐、平野、脇阪、糟屋を始めと致して荒小性の面々が控ゐました、秀吉公許りはお小性と云ひながら、加藤虎之助清正だの福島市松正則だの、脇阪甚内安治を始めと致して、皆一騎當千のお小性でございます、何んだか稚子だのお小性だのと言ふと大層やさしく思はれますな、八百屋お七の戀人であつた吉祥寺の小性吉佐なんて言ふと大層やさし相に見ゐます、人に名前でも呼ばれると、女の樣な聲で、ハイ……と云ひさうな、所

が秀吉公の小性はさうでない、虎之助と云ふとヲ……イと云ふ丸で鬼の様な恐ろしげなる所の連中許りでございます……、備ゑを鶴翼の陣に取つて暫らくの間は、双方共に對陣をしてありましたが、双方共に鐵砲組を出して、始めは鐵砲せり合と云ふ戰爭に致した所が、喧嘩に致した所がなか〳〵槍合せ、或は陣刀を抜いて斬合と云ふのは、急な事ではございません、喧嘩だつて口論の方が長くつて打合は遲びものでございます、暫らくの間鐵砲せり合に及んで居る内に、羽柴勢の方からいたして槍を捨つて置いて、先手の同勢から一番槍と名乘つて一人馬をあをつて、鈴木飛彈守、根來山小密茶坊の同勢の中へ面もふらず乘込みました、此處に及んで鐵砲せり合は止めと相成り、槍組を出して槍を合す、遂に亂軍と相成りましたな、然るに根來山の小密茶が働きと云ふものは、前代未聞でありました、八尺あ

る例の樫の木の棒を、リュ〳〵と水車の如くにうち振り、當る所の嫌ひなく、さん〳〵にうち据ゑうち倒す、之れが爲に棒に當つて死する者は數の知れざる許り、先手の同勢は足並亂れて見ゑました、先手が潰れました事故、羽柴の軍勢へ對しておめき叫んで討つてかゝる、羽柴方に於ても、すはこそ根來の小密茶を討取れと、御旗本に控ゑたる加藤、福島、始め吾れも〳〵もと乘出して參ります、斯くと見るより飛彈守重幸は自身と槍を捨つて置いて、根來の小密茶を助けん乘出して參りました事ゆへ、此處に亂軍と相成り勝負は何時はてべきとも見ゑず、両陣が跳立つる所の砂塵は實に煙の如く、敵味方の區別さえも判然しがたい位、遂に其の日は勝負がつかざる事ゆへ此處に物分れと相成りまして、双方共に楯板を陣營外に並べて、周圍を嚴重に拍子をうつて廻る、之れをガン番と稱ゑまして、周圍を怠

かり無く鞏固して居ります……、明くれば十九日の戰、其の夜飛彈守重幸に於ては、固より此の合戰に、妙將と言はれる羽柴筑前守秀吉……、大將多き中にも、此の秀吉公は智將にあらず勇將にあらず、妙將と云ふ、妙の一字と云ふものは物のなづけ樣のないのを妙と云ふのでございます、早い譬が、甲「ヲイ、斯りや他から貰つたもんだ、一つ食て見給へ」乙「斯りや何んだい」甲「イヤ名前は解らない」乙「フウン、何う云ふ味だな」甲「マア宜いから食つて見給へ」乙「赤い樣な青い樣な黑味を帶びた何んと云ふ色だい、斯りやマア」口の中へ入れて見てから、乙「成程辛い樣な甘い樣な澁い樣な苦い樣な、斯りや妙なものだ、即ち名のつけ樣がないのを妙と云ふ、夫れ位な秀吉でございますから、兎ても此の合戰、勝利になるべき筈はない、然らば空しく討死致すに於ては、顯如上人の御先途を見屆け奉る事相成らず

依て此處に吾が身換りを置き、已れは此處を立退いて世の中の世捨人と相成つて、信長が石山本願寺へ對して、此の後の仕向けに注目しやうと云ふので、雜兵の姿と相成つて落延びました然らば當十九日の戰には大將ありと雖も眞の重幸ならず、面頰逆面を着けて居りますから、顏は少しも解りません……、根來山の小密茶に於ては、重幸と押並んだる事にて、相も變らず羽柴の同勢をさん〳〵に駈け惱まして居ります、數多羽柴勢も昨日の戰ひに、向ふは吾が三分の一にも足らざる小勢にて、別けて相手は野武士、豪士同樣なる所の飛彈守、副大將は出家たる所の小密茶の爲に、さん〳〵に惱まされましたから、今ぞは是非に昨日の恥辱を雪がん意氣込でございますから、引くな退くなと群を勵まして攻め戰ふのでございます、備ゐを陰陽立花に立換へ、合する劒の音は絹を裂くがごとく、馳せ違ふる馬の

音は雷の如く、喚き叫ぶ聲は天地を響かし、死骸は積んで累々と丘をなし、血は流れて小河の如くに思はれます、其の内に寡は衆に敵する事能はず、石山方は追々其の所に討死と相成り、殘り少なに相成りました事故、早や之れまでなりと根來の小密茶、獅子奮迅の勇を顯したる事にて、羽柴の同勢を右左にうち惱まして居る内に、固より僞物の重幸でございますから、遂に討死を致しました、亂軍の中に飛彈守重幸が討死と云ふ事を敵、味方が各々騒ぎ廻ります事故、小密茶は、「さては重幸どの に死に遲れたり、早くも冥土の御供仕らん」とわつてうかゞひ見ますれば、桐藤の馬印、五三の桐の紋付いたる幟を押樹て、秀吉の陣中に秀吉の姿が見えましたる事故、「馬は最早乘殺して了ひ、徒歩立と相成つた、小密茶棒をふりかぶつて置いて、秀吉の本陣を望んで乘込んで參ります時に、身体の大きい小密茶

でございますから、羽柴方でも能く見ます、昨日より健氣な振舞なる根來の小密茶を討取り、吾れこそ恩賞に預からんと秀吉の旗下より脇阪甚内安治、槍を捻つて乘出しました、甚内「如何に根來の小密茶、羽柴筑前守秀吉公の小性にさる者ありと聞を取つたる脇阪甚内安治なり、いでや一槍參らん」と喚いてかゝれば、ニッコリ笑を含んだ小密茶、小密「しをらしき所の若者の振舞なり、いでや」とわつて十二三合と云ふもの互に合はされましたが、焦つて打下したる所の棒の爲に、さすがの脇阪は持たる所の槍をハッシと許り、棒を以てうち落されました、此の脇阪甚内と云ふ人は、赤井惡右衛門景遠と云ふ、中國有名の豪傑が貔と云ふ獸物を退治て置いて、貔の皮を指物に致した赤井方の大將でありましたが、脇阪甚内が一戰に及んで惡右衛門を討ち、貔の皮の指物を分取致した、夫れで脇阪甚内は二度

目の赤井惡右衛門と爲りまして、右の貉の皮の指物を致して、自慢で勇を振つた其の脇阪甚内でございますが、十二三合に致して己れの味方の中へ逃げ込んで了ひました、小密茶カラ〳〵ッとうち笑ひましたが、「猪口才なる所の敵の振舞、出で合ふものゝわらさる時は、筑前守秀吉を討取つて、冥土の道伴れに致さん」と倘も喚き叫んで乘込んで來る時に、「いでや敵御參なれ」と槍を捻つて騎出したは加藤孫六嘉明、後に加藤左馬之介嘉明となりました、彼の有名な塙團右衛門の主人でございますが……、之れまた七八合にいたして得物を同じくぶち落されました事故、己れが味方の中に逃げ込みました、其の後へ出ましたのが、一名福島のしばき槍と名を取つた福島市松正則でございますが、石突まで筋金の通りまして握太の槍を提さげ、乘出して參りましたが、「正則」いで坊主、吾れこそは福島市松正則なり

見參なさん」と槍をひねつて突懸りました、小密「ヤア汝が名高き福島正則なるか、小密茶が冥土の道連れには好き敵、御參なれ」とブウ……ン、ブウ……ンと例の樫の木の棒を執てうち込み來たりました、正則槍をひねつて丁々發止丁發止、一上一下上中下段と強情ものゝ正則でございますから、突かうとはしないで以てうち合つて居る、小密茶が一聲喚いてうち込み來つた樫の木の棒、さすがの正則も手に碎きましたる事ゆへ、同じく槍は大地へ取落しました、正則は斯は殘念なりと心得、正則「坊主組打參れ……」と聲を出しますと、大手を開いて待ち受けます、猪口才なりとあつて根來の小密茶、棒を棄てたる事にてゝンヅと詐り組み合ひましたが、さすがの小密茶、エイヤゝンヅと云ふと市松正則を沖にひつ吊しました、之れを見るより羽柴筑前守秀吉、秀吉「あれ誰れかある、正則を助けよや」とあ

りました、然るに福島正則を冲にひつ吊す位な根來の小密茶でございますから、誰れも助けに行くものがない、此の時倶茶利夜叉の再來と言はれる例の加藤虎之助藤原清正、銀の三尺立烏帽子の兜の鎧の高紐にはねかやされました、身には藤縅目の鎧を一着に及ばれ、銀の小手脛當をつけられました、手には目方十六貫目あらうと云ふ臥龍丸と名附けたる槍を提げたる事にて地響きいたして乗出しました、清正「如何に根來の小密茶、羽柴筑前守の荒小性の内にて、加藤虎之助清正のある事を知らざるや、高の知れたる市松正則を討取つて何にが手柄に相成る、吾こそは法華經の信者、毘沙門天の再來なりと名乘る此の清正、汝の爲には宗敵同様なり、いで尋常に勝負に及べ……」と言ふと、根來の小密茶、眼血走り眉逆立ち清正をハッタと睨んだが小密「ようてそ出せたり清正、汝が言ふ如く吾れは一向宗の末派

なる根來の小密茶なり、汝が法華經の大行者と名乘るからには宗敵、怨敵なり……、斯樣な小僧は相手でない」と云ふと福島正則を傍へ投つて了ひました、正則ヲ、痛いと痛むところを摩りながら、「清正め己れを助ける爲とは言ひながら甚い事を言やがる、小密茶の野郎め、己れを斯んな小僧だと言やがる、憎い奴だ」と思ふがさすがの正則も全く此の時は我を折りました此處に清正は臥龍丸と云ふ十文字の槍を執つたる事にて、二十餘合と云ふもの一生懸命と相成りうち合ふ、小密茶がうち込む棒を綾して置いて突を入れる、突出す槍をばひつ拂つて置いてうち込む、はてしなければ力自慢の小密茶が、「清正、組打勝負を……」と云ふから、心得たりやとあつて清正、槍を投げ棄てたる事にて、エイヤムンズと組合ひましたが、根來の小密茶も力自慢の豪傑でございますけれども、身の長六尺八寸、清正は

身の長七尺三寸、脊が高うございますから、エイヤッと福島正則を冲にひつ吊した樣な譯には行きません、何にしろ七十五人力ある所の清正でございます、身体の目方だつて四十五貫目位あります、夫れに兜や鎧、小手脛當或は陣刀、差添を入れますと百貫以上の人でございます、其の百貫の身体を冲にひつ吊すと云ふのはなか〳〵難しい事でございますから、小密茶も斯りや一樣でいかぬと心得たる事ゆへ、エイヤッと力量を出して足で蹈み倒さんと致しました、清正に於ても、さうは爲らぬと暫らくの間揉み合ひ、へし合ひして居る内に、力も張つて置いて小密茶が押し出す其の力を利用して置いて、ヒヲリと体を變しましたる事ゆへ、ズンデンドッと俯向さまに倒れる奴を、清正襟筋の邊りをムンヅと押ねて馬乘りに相成りました、根來の小密茶起き上らんと致しますが、其奴は駄目でございます、何に

しろ百貫目の物が上に乘つて、其處へ七十五人で押へて居るのでございますから……、之れを見ると云ふと福島正則は飛び出して參つて、行きなり根來の小密茶の頭をポカン……と擲りつけて押付ける、之れを見るより脇阪甚内を始め、吾れも〳〵と荒小性の面々來つて、手足となく身体となく彼方此方と押ねて

「動くな、ウヽン、動くな、ウヽンと押ねつけるから清正が、

清正「お手傳下さるな此の清正に助太刀は御無用、お離しなさい清正一手にて生捕るから」と言ひながら、立上つてヲア起きろと云ふと、モウ死んで了つて居る、斯りや何うも死ぬ譯でございます、小密茶弱い譯でございませんが、今まで氣を張つて居た奴、清正に押ね付けられて、モウ己れは之れでいかないと云ふので氣の抜けた所へ、清正が百貫目の身体と七十五人力で押ねつけた、其の上に正則始め、荒小性の面々が押ねつけたので

ございますから、何れも弱いのは無い、三十五人力、五十人力とある人間許りでございますから、到頭押潰して了つたんで、つまら無い討死をしたのでございます、討死と云ふのはございますが、潰死と云ふのは之れが始てゞございます……、さて此處に鈴木飛彈守は討死を遂げたと爲り、根來の小密茶は清正の猛勇に依て首尾よくうち取る事に相成りました、殘れる所の敗兵は各々石山本願寺へさして逃げ歸ります……、此處に羽柴方に於ては勝鯨波、凱歌をつくつて置いて、引上げる事に相成りましたが、石山に於ては重幸、小密茶の討死したのを聞きまして、顯如上人は大に悲みて、頻りと成佛回香を致されました、さて秀吉公は信長を諫めて置いて、再び中國へ出陣に相成ります其の後で信長は上洛を遂げまして、一天萬乘の君に泰問を遂げましたのは、禁裡守護の爲に、僅か十三里離れし石山の地に居

城を築きたいと云ふ、此處に勅命が下りまして、石山へ御使を向けられましたから勅命に背く事は相成りません、遂に本願寺は紀の國鷺の森へ引遷りに爲りましたが、此の引上げに爲る時に、信長が顯如上人を討取らうとしましたのを、御合弟の教如上人と云ふお方が、石山にふみ止まり、顯如上人の身變りに爲つて、顯如上人を裏門より落しました、夫れが爲に同じ一向宗の御血脈の本山でありながら、西本願寺、東本願寺と區別が出來ると云ふ詳細しきお話があるのでございますが、之れは石山軍記の講談でございまして、本篇の餘事に相成りますから、先づ此の邊の所に致して置いて、一息ついで清正が智勇のお話を申しあげませう」

第十三席

ニ、加藤虎之助が武勇のお話は數限りございませんが、此の清正と云ふ人は、文道の方にもなか〳〵明らかな人でございました、其の中にも隨分色々と好きお話がございますが、此處に能く同業者が一席講談で致しますのをチョッと申しあげて置きます……、此處に彼の有名なる明智十兵衛光秀でございますが此の光秀の末の娘が、織田七兵衛尉信澄と云ふ、尼ケ崎の城主でございますが、此の人の許へ信長公が媒人を遊ばされまして御結婚がございます、其處で羽柴筑前守秀吉が之れをお聞きに相成り、何にか祝物をせんければ爲らんと云ふので、色々とお考へに爲りました其の結果、日頃御秘藏に爲つて居ります、狩野永徳が書きました金の屏風がございまして、夫れには山櫻に

山鳥の繪が書いてございます、秀吉公は誠に此の繪が能く出來て居り、また目出度い樣に思はれましたから、之れを祝物に贈らうと云ふので虎之助清正をお呼びに相成り、秀吉「之れ虎之助」虎之「ハハッ」秀吉「之れを結婚の祝ひに遣らうと思ふから、明智光秀の方へ贈つて參れ」虎之「承りましてございます」と早速其の屏風を持て、明智光秀の屋敷へ遣つて來ました、虎之「お願ひ申します」取次が出て參りまして、取次「何れからでございます」虎之「私は羽柴筑前守秀吉の家來、加藤虎之助清正でございます、此の度御當家さまに於ては、織田信澄さまと御緣組に相成り、主人秀吉誠に恐悦至極に存じ居ります、之れはお祝の印まで、何うか宜しくお取次を願ひます」取次「之れは御叮寧にも有難う存じます、何うか暫らく……」と言つて取次は其の屏風を持て奥へ這入りましたが」取次「御主人に申しあげます」光秀「

何んだ」　取次「筑前守秀吉どのより斯樣なるお祝物でございます家來の加藤虎之助清正がお使として參つて居ります」　光秀「フッヽヽ左樣か……」と言ひながら彼の屏風を開ひて見ましたが、フヽヽとうち笑ひ、　秀吉と云ふ奴は白痴な奴だ、斯樣な繪を遣したのは知つて贈つたのか知らないで贈つたのか解らんが、兎に角其の清正と云ふものを呼んで遣れ、一つ耻をかゝして遣るから」　取次「承知をいたしました」と取次は出て參りまして、取次「主人がお招きございますから、何うかお通りを……」　虎之「然らば御免を蒙りませう」と虎之助清正は案内について奥へ通ります」と光秀は屏風を開いて、てんと坐つて居ります、虎之助は遙か末座に下つて両手をつかね、虎之「只今申上げましたる如く主人秀吉お喜びを申しあげ奉ります」　光秀「虎之助、只今贈り呉れたる所の屏風、光秀甚だ面白からぬ、何にが故に斯樣なる不

吉の繪を贈りしや、定めし其の方主人無學なるが故であらうと思ふが、または身共を耻かしめんが爲に、斯樣なものを贈つたのであるか何う云ふ譯である」、虎之「ハッ、手前主人が心を籠めての贈り物、御意に叶ひませず、不吉なるものと仰せられますが如何なる譯でございまするか」　光秀「虎之助、其の方解らんとあれば聞かして遣るが、此の繪を見よ、此の櫻と云ふものは、盛りの甚だ短かきものである、また山鳥と云ふものは上つ方の忌み嫌はれるものであつて結婚を祝ふと云ふには、誠に目出たく無い品である」　虎之「ハハァ櫻は目出たからぬものでございますか」　光秀「如何にも目出たくないものである」　虎之「山島はまた上つ方の忌み嫌はれるものでございまするか」　光秀「左樣だ」　虎之「併し私は御結婚のお祝ひに、山櫻と山鳥の繪は誠に目出たきものと心得ます」　光秀「何故に目出たいと其の方は言ふ」　虎之「恐

れながら貴方は歌道の御名人と承はり居りました、然るに只今の御一言を以て見ますれば未だ歌道にお暗ひと存じます」　光秀「何に、虎之助、身共を歌道に暗ひと申すか」　虎之「されば古今集に何誰のお歌かは忘れましたが、目出たき様に書いてございますお歌がございますが、夫れにお心が注きませんか」　光秀「ウン古今集に……、何んと言ふ歌か」　虎之「左様でございます、エヽ……、櫻咲き山鳥の尾のながく〳〵と眺め盡きせぬ契りなりけり と言ふのでございました」　光秀ハッタと膝をうつて、「如何にも、左様な歌があるとは氣が注かなかつたが、さすがは秀吉の家來加藤虎之助である、感服いたした、實に其の方は文武両道の達人である、虎之助、何んと花に寄する祝と言ふ題にて一首詠んで呉れんか」　虎之「恐れながら歌の道は少しも心得ませんが只だ幼少の頃お寺にありまして、少々學問を致しました位でご

ざいますから」　光秀「イヤ夫れは其の方が謙遜と申すものである古今集を諳んずる位、必ちず歌の道に精しいに違ひ無い、是非とも一首頼む」　虎之「仰せにございまするに依り、さらばお言葉に從ひまして、一首口吟むでございませう、何うか料紙硯を拜借仕ります」と其處で料紙、硯を取寄せまして、サラ〳〵と認めました、　虎之「恐れながら拙きもの御覽下さいます樣」　光秀、虎之助清正が認めました歌を見ますと言ふと、筆跡もなか〳〵達筆でございます……、　先日此の過幣局のうちに開いてございます泉布觀の豊公遺物展覽會へ參りまして、清正公がお書きに爲つたものを拜見致し、夫れ〳〵道の人にも聞いて見ましたがなか〳〵筆跡お上手である相でございます、尤も彼の太閤秀吉公の御筆跡も澤山出てございます、矢張り天下を握る程の人は違ふたものでございます、世間では秀吉公は無學じやと言

ひますが、彼の泉布觀へ行つてお書きに爲つたものを御覽、無學じやと言つて笑ふ人があれ位書けませうか、なか〳〵

秀吉公と云ひ、清正公と云ひ立派な御筆跡でございます……、今夫れへ認めました歌が、千代八千代、むすぶ妹脊の契りして花にも實にも末の榮ねは」と言ふのでございます、まことに能く出來た歌でございます、光秀は大ひに感心を致しまして、

光秀「あゝ天晴れなるかな其の方は、實に文武兩道の達人である、虎之助、今日の使誠に大儀である、何うか秀吉どのに宜しくお禮を申して呉れ、之れは失禮であるが、持ち歸つて呉れ」と黄金五枚を紙に包みまして呉れました、虎之助清正大ひに喜びまして有難く頂戴いたし、秀吉の方へ立歸りましたが、早速御主人に今日の次第を申しあげますと、秀吉公も大ひに御感心遊ばしました……、然るに明智光秀、後にて古今集を篤と取調べて見ました

が、一向に虎之助清正が申したやうな歌はございません、無い筈でございます、全く清正が主人の耻に爲らん樣にと言ふので其の場で思ひついた儘を詠んだのでございます、之れは唯だ清正が文道にも明るいと云ふ一證でございます、さて斯樣な話は數多でございますが、餘り高尚すぎますし、かつ又時代を追ふてお話いたしますには、切々に相成りますから、之れのみにて止めて置きまして、さて引續き虎之助清正が、生涯の功名手柄の戰爭の方に引移つて申しあげますが、彼の三歳の童子も能く知つて居りますのは、尼ヶ崎廣德寺門前に於て、四方田但馬守政高と一騎討と云ふのでございます、久しき以前芳年先生が、大幅二枚の繪に書きました、秀吉が廣德寺の裏門から逃げ込む所を、清正と四方田とが一騎討をして居る所でございます、尤も芳年と云ふ人は、中興の名人でございますが、繪でございます

から彼の樣に書かなければならないのでございませうが、秀吉の姿を現してあるのは、芳年先生の失策でございませう……、即ち此の尼ヶ崎にて、四方田但馬守政高をうち取ります、其の起原をチョッと申しあげますと、此處に天正の十年六月二日、京都蛸薬師本能寺に於て、信長は明智光秀の爲に滅ぶる事と相成り、續いて二城のお城にお出で、になる御子息三位中將信忠は御生害を遊ばさるゝ事になりました、之れは前回にもチョッと述べましたる通り、元來信長と云ふ人が、此の秀吉と光秀を抱いたと云ふのは、此の二人に充分働かして置いて、天下を取らうと云ふ考えでありました、固より柴田や瀧川などは信長の譜代の家來ではありますが、信長を助ける許りで、自分が天下を望む程の大器量のある人でございません、然るに秀吉と云ふ人は信長よりは段の上な人でございますから、自分の智慧を振つ

て遣つた日には必ず信長が己れを殺すに違ひないと見拔きました、其處で已れ一人にては信長を、充分に男にする事が出來ないから、美濃の土岐山中に居りました、前名を土岐十兵衛と云ふ、後年明智の城を賜はりまして、明智十兵衛光秀、之れと前年交りがあるから、此の光秀を引出して參つて、信長の幕下と致せば、自分の片相手が出來ると考えましたから、秀吉が充分に光秀の器量漢大なる事を物語つて置いて、秀吉が使者に行きました、此の一條は餘事に渉る樣でございますが、大變味のある所で、光秀が本能寺を討つた譯が明かに爲るのでございますから、宜しく御熟讀を願ひます、さて秀吉は土岐の山中へ參つて、「私は織田信長の家來で、木下藤吉郎秀吉と云ふものだが、何うか光秀どのに逢して貰ひたい」と斯う言つて行きました、光秀土岐の山中にあり、軍學をねりまして時節の來る

のを待つて居るのでございます、取次が奥へ這入りまして、取次「先生申しあげます」光秀「何んだ」取次「織田信長の家來で、木下藤吉郎秀吉と云ふ人が見えました」光秀「ハハア今賣出しの秀吉と云ふ猿面冠者と異名を取つたキヤツ〳〵に似て居る奴か」取次「さうでがすので」光秀「光秀は今居るけれども寢て居ると申せ、起して呉れろと申したら、寢て了つたら急には起きんと申せ」取次「承まりました」と取次は表へ出て參り、取次「大きにお待遠うさまでございまして、先生樣は今寢てござらつしやるので、起して上げたうございますが、内の先生は寢たれば起きない人で何うか目の醒めたる時分を計つてまたござらつしやれ、夫れとも至急な御用事なれば、私が承はつて置いて言つて置きますから」秀吉「ハア光秀どのは寢てござるか、多分さうだらうと思つた」ヤア起きるまで待つて居るから好いわ」取次「併し先生が寢込んだら急には起きません、壹寢しても半日か一日、當り前に寢たれば三日三晩位ひ、酒でも飲んで寢さつしやつたら七日と十日、寢心が好くば半月か一月位ひ寢て暮すので、世間の人は人間僅が五十年、二十五年は寢て暮すと云ひますが、私が所の先生は五十年の内、四十年位は寢て暮さつしやる人で」秀吉「イヤ搆はん、起きるまで待つて居るから」言ふと秀吉、其處等此處等を駈け歩いて、柴だの或ひは枯枝を取つて參りました、燧道具を取出しますと、ドン〳〵焚火を始めました、光秀の弟子は消魂て見て居ります、ひどい野郎だと思ふうちに、其の焚火の脇の所へ大小を置いて大胡坐をかき、腰に提げて參りました瓢箪の酒を取出して、此奴を飲み、脊負つて參りました破籠の中から菜を出して食ひながら、チビリ〳〵と酒を飲み、遠りはシン〳〵と致して居る山景色の樣子を、キヨロ〳〵と見

廻して居ります、弟子の奴は驚いて、身体は小さいが恐しく呆氣な男だと消魂て見て居ました、やがて握飯を取出しますと、握飯をムシャ〳〵と食つて了つた、其の儘腕を枕と致してグウ〳〵と高鼾で寢て了ひましたな……、然るに奥に居ました光秀は、モウ秀吉は立歸つたか知らんと潜かに來つてヒョイと見ますと、秀吉はグウ〳〵寢て居る樣子でございますから、「ハハア音に名高き所の秀吉、斯くあらうと心得た」と之れから秀吉を搖り起して置いて、互ひに問答に及びました、其の問答と云ふものは、秀吉が光秀に向つて、秀吉「家を興し名を揚げてこそ先祖への孝道なり、普天の下、率土の濱、王土王臣にあらざるはなし、然るに斯く山間僻地に籠つて、今や天下は麻の如くに亂れたる、天下を治めんと云ふ武將、織田信長と言へるものより斯く秀吉を使者と致して招きに參つたるに、夫れに從はざると云ふ御身の心の程が相解らん」光秀「イヤ秀吉、御身の言葉感心な致した、併し吾れつら〳〵思ひ見るに、織田上總介信長と云ふもの、斯く云ふ光秀が生涯の主人と致する人では無い」秀吉「如何にも光秀どの、御身生涯の主人と致するものは、上一天萬乘の君よりあるまい」光秀「云はれたりやな秀吉、身共が主人と致するは一天萬乘の君一人なり」秀吉「然らば何にを以て御身は信長の本に參つて、信長に力を添ひ、一日も早く天下を平定致し、上は御一人より、下は萬民の塗炭を救ひ、功成り名就げて身を退ぞかざるや」、光秀「此の光秀が斯く土岐の山中に引籠るは世に恐ろしきもの一つあり」秀吉「其の恐ろしきものとは何んぞや」光秀「されば化物なり」光秀「何に化物とな、天晴器量人の尊公が、化物を恐るゝとは其の言葉を解せず」光秀「イヤとよ、狐狸妖怪の化物なれば光秀恐るゝに足らず、織田信長の馬の口を

して隨身なし。今また吾れを招かんが爲に、唯だ一人にて此の土岐の山中に登り、此の光秀を誘ひ出して、共に天下を治むる所の相談相手に致さんと云ふ、此の木下藤吉郎秀吉と云ふ化物を恐るゝが故に、吾れは斯る山間僻地に身をひそめ、生涯隱士と相成つて、花鳥風月を友とする考なり」秀吉之れを聞いて大きな口を開いてカラ〳〵ッとうち笑ひましたが、秀吉「云はれたりやな光秀どの、吾れ今日織田の四老臣の内に加はり、天下に恐しきものあらざれども、今己れの器量、己れの才を以て天下を掌握いたす事掌を見るが如き明智ありながら、却て人の交りを絶つて土岐の山中に隱士と相成り、時節の來るを相待つと云ふ僞聖人を氣取る、さながら臥龍孔明と言はれし諸葛武侯にもおさ〳〵劣らぬ所の化物あり、此の光秀と言ふる化物こそ秀吉が明暮心にかゝる恐ろしきものなり」之れを土岐山中の化

物問答と云ひまして、太閤記の内では大眼目のお話でございますが、併し此處には餘事に渉るの恐れがありますから、餘り長く詳細くは遣りませんが、斯う云ふ次第で、光秀は明智十兵衛と爲つて、信長の家來と爲つたのでございますから、初から光秀と秀吉は氣が合ひます、表面的は大層仲が惡いやうに見ゐますが……、併し此の化物問答から、秀吉と光秀が密着いたして置いて、織田信長をば蹈臺と致し、互ひに天下を折半いたす樣にかゝりました、斯う云ひますと誠に太閤記と云ふ講釋は儲かりません、其處で此の化物問答は、滅多に遣るものはございません、大抵は光秀を惡樣にのゝしり、秀吉を譽めて器量人にして了ひますが、マア何うも二人とも大層なものでございます、併し此の秀吉と光秀との器量は、其の店の出し方が違ひました夫れ故信長の見込みが違ふたのでございますが、秀吉の方は他

所の家の軒下を借つて、硝子燈を買ふ錢がないから、其處の家の明燈を借り、夫れを賣つた錢で以て硝子燈を買ひ、始めて出し店を仕樣と云ふ、所が光秀の方はチャンと錢を調ゐて置いてさうして此處に夜見世を出すと云ふ樣な風でございますから、信長も二人が心中器量の程を試さん爲に、屢々物を尋ねます、光秀はまだ秀吉よりは正直でございますから、卽答をして了ひます、秀吉はモウ一應考ゐましてと斯う云ふ、自分の器量を半分しか出して見せない、半分でしまつて置くのでございます、夫れでございますから、信長は光秀の方が秀吉より器量は上だと見ました、モッ今光秀が丹波丹後兩國の主と爲りましたが、之れを今の內に無きものにせねばならぬと、無理難題を申かけたのでございます、何にも森蘭丸の妻は、光秀が妹の桔梗を遣らんと云ふので、蘭丸が信長に讒言を搆ゐた、夫れが爲に信長

が光秀を憎んで、安土に於て打擲をしたのと云ふのでございます、唯だ憎むのでは無い、光秀を怒らして遣れば、必らず光秀が此の信長を討たうとするに定つてあるから、信長は光秀を逆賊と名をつけて、信長の勢を以て光秀を滅ぼして了ふ、而して置いて、今中國を攻め取り、立歸つて參つた秀吉に無理難題を言ひかけて置いて、之れをば首尾好く討取つて了ふ、さすれば天下は信長の手に歸すると云ふ、信長の考でございました、然るに光秀はなか〳〵忍耐力の强い人でございますから、如何なる無理難題を言ひかけられると雖ども、能うこらゑて辛棒をします、其處で信長も仕方ございませんから、結局光秀に「其の方丹波丹後兩國を此の信長に差出して置いて、元の浪人と相成り、中國へ罷り越し、秀吉の旗下と相成つて中國を其の方斬取に致せ」と斯う云ひ渡しました、尤も丹波、丹後、江州半國

は期りや信長から貰つたのではございません、丹波、丹後は斬取にしたのでございまして、之れには光秀の丹波攻めと云ふお話もございますが、略して置きます……、さすがの光秀位の器量人も、此の信長が無理難題には何んと云つて好いか解りません其處で其の場を立つて江州安土へ戻つて參りました、早速一族の明智左馬之介光俊に向ひまして、光秀「此の度信長が斯く〳〵然か〳〵なる堪忍ならざる所の難題を申しかけられ、早速に返答もなり兼ぬるから、今日にては臣下の者も大勢之れある事ゆへ、後を期して御返答仕るとお答ゑ致して立歸つたが、何んと致したものであらう」云ふと左馬之介光俊が、光俊「宜しい、搆ひません、貴方は阿呆に爲つて、信長に所領を殘らず差上げ、一文なしの浪人に爲つて中國へお越しに相成り、殘念でも秀吉の幕下と相成つて、旗下で以て戰爭をなさい、只今だけの所領

や所領は必らず此の光俊を始め、麾下のものが一生懸命になつて斬取りますから……、左樣かと云つて左馬之介光俊を下げて了ひました、其の後へ齋藤内藏之助利三と云ふ人を呼んで相談をしますと、齋藤内藏之助利三が、利三「そりや信長と云ふ人が餘りに無体、中國の義は之れはお斷りを申しあげて置いて、信長どのと尋常の合戰をなさい、近頃信長は我意增長に及んで、神社佛閣を破却いたし、餘りと申せば無体な云ひ狀、信長を征伐に及んで、上御一人の宸襟を安んじ、下萬民の塗炭の苦みを助けてこそ四海治める所の君と云はれませう、天下は一人の天下にあらずと云ひますから、匆々謀叛の旗揚げをなさい」と勸めました、左馬之助光俊は、秀吉の旗下でも何んでも宜しい、云ひなり次第に爲つて行きなさい、さうすればお前さんは人間が阿呆で役に立たないものと見て、以後は信長がいぢめますま

い、お前さんをいぢめないから、秀吉に無理難題を云ふて苦める、秀吉は必ず信長を討つに定つて居りますから、信長を討つたら、貴方が信長の吊合戦だと秀吉を討つとすれば、日本國中の大小名は必ず味方をする、さうして秀吉を退治て了ゐれば、天下は貴方のものになると云ふ、また齋藤内藏之助は、今中國と合戦最中の秀吉である、信長は僅かな同勢で都に居るのである から、京都へ攻め入つて信長を討つて了ひ、中國の毛利、吉川小早川三家と共に、秀吉を挟み討に討取つて了ゐれば、後は織田幕下の柴田、滝川位、斯樣なものは何程騒いでも恐るゝに足らんと云ふ、何れが好いやらッァ斯う爲ますと、迷ふて參ります、迷ふと物はいけないものでございます、マァ何うも人間あゝでも無い、斯うでも無いと迷神が出ますと、バナマの帽子と換ゐて見やうか、矢張鳥打帽子の方が輕ふて好いか、イヤ蛮瓜

帽の方が好からう、イヤ西瓜をかぶらうか、夫れ迷ふて來ます……、其處で光秀は溝尾庄兵衛茂朝を呼んで相談しますと、溝尾庄兵衛茂朝が、茂朝「之れは我が君には、信長を討取つて了ひ遊ばしませ、信長を討取れば明智の天下と爲ります、其の時貴方は御切腹をなさつてお果て遊ばせ、御子息十兵衛光義公へ對し二代の將軍と云ふ事にすれば、主を殺した貴方の罪は消ゑ明智の家は萬代不易に相成りませう、不肖ながら此の庄兵衛、御一門の方々を始め、朋輩と諸共に、若殿樣の御身の守護を致しませう」と云ふ斯う云ふ異見でございます、三人各々意見が違ひます、其處でまた〳〵左馬之介光俊を呼んで、光秀「さて左馬之介、溝尾庄兵衛は斯う申す、齋藤内藏之助は斯樣云つたが何うしやう」と云ひますと、明智左馬之介光俊は、天を仰いで嘆息しました、光俊「エ、我が君樣には文學と云ひ、武藝と云ひ

御器量と云ひ、秀吉どのより思ねば、遙か優つてお出でに爲りますが、傾むく御運の前兆でございまするか、私は貴方の御一門、明智左馬之介光俊でございます、失禮ながら溝尾、齋藤は譜代の御家來と云ふのではございません、此の者共に信長公を討つ討たざる御相談をなさいます樣では、織田信長公に叛き奉る色が充分に解つて居りまする、萬一三日の間猶豫をいたす時は、信長軍勢を催促に及んで、逆賊明智光秀を討つなりとあつて、必らず共に綸旨を請ひ受け、我が君をば攻め滅ぼさんと軍勢を向けるに相違ございません、此の上からは左馬之介お諫めを入れたる事故、信長公へ對して仰せつけの通り、中國へ同勢を率ひて出陣いたすと申しあげ、京都へ這入つて不意に二條のお城及び本能寺へ向けて軍勢を催促に及び、一夜の中に攻め滅ぼして了はされば一大事でございます」と申しあげました、其

處で夫れッと俄に軍勢を催促に及んだのでございますから、本能寺の戰爭はいと〳〵人數が少なうございます、信長もよもやと思ひました、左馬之介位な器量人が明智光秀へ對して、謀叛を勸めるとは思ひません、光秀が立歸つて兎や角相談をして居る其の内に、堪忍の緒をきつて軍勢を向けるに違ひないから、此方は三日の間に光秀を攻め滅さうと思ふて居る所へ、不意に軍勢を率いて京都へ這入つて來ましたから、實に油斷をして居ました、之れぞ即ち本能寺合戰の端緒でございまして、安土の三人問答と云ふ講談でございます、此の化物問答、安土の三人問答を十分に申しあげますと、面白き一冊の講談に爲るのでございますが、加藤清正の傳記が外に爲りますから、またお望みに依りまして口演致す事と仕ります、大畧に致して置きます……、さて本能寺に於ては、右大臣信長、二條のお城に於ては、三位

中將信忠、頃も天正十年六月の二日の夜、遂に明智の同勢の爲に、落命を遂げられました……、然るに中國にては中國三大將と云ふ毛利、吉川、小早川の三家を相手と致して、羽柴筑前守秀吉、合戰の眞最中の所へ、右大臣信長公御最後を承はり、いよ〳〵三家と和談に及んで、中國の加勢を引連れて、秀吉の同勢、尼ヶ崎城を望んで引上げて參る途中、四方田但馬守政高、明石儀太夫の爲に一生の災難と云ふ、加藤虎之助清正の忠義に依つて四方田但馬守を討ち取ると云ふ、有名の廣德寺門前一騎討の勝負と云ふお話でございますが、チヨト息を續いで次席に申しあげませう、

第十四席

秀吉の同勢は中國河津ケ鼻に對陣と爲りました、然るに明智光秀、中國の三家へ密使を送らんと云ふ、此の密使は明智の家來横田傳八と云ふものでございますが、之れをば堀尾の陣中に於て生捕に及びましたが、如何に窮命いたすといへども白狀致さず、依て秀吉の陣中へ連れ來つて尋問に及びましたが、秀吉右使の者横田傳八の道中差の鞘の中に仕込んでありました書面を以て、始めて京都蛸藥師本能寺に於て信長御落命の次第を承知いたしました、然らば物をも言はず横田傳八を一刀の元に斬つて棄てました、秀吉の陣中の者は何んで秀吉公が此の者を殺されたのやら、また刀の鞘から出た手紙は何う云ふ文字が書いてあつたのやら知るもの絶えて無いのでございます……、然るに中國三家に於ては小早川左衛門督隆景、毛利右馬之頭輝元、吉川大江元春の三人が軍議評定の折からに、安國寺惠瓊長老と云

へるもの進み出でまして、　惠瓊「恐れながら秀吉と言ふものは後年天下を掌握致する人でございまする、　私が前年諸國遍歴をいたし、　參州岡崎に於て、彼の秀吉と言ゐるもの私が賣卜者と相成つて居ります所へ、人相手の相を見て呉れと申しまする事故、いち〳〵彼れが人相を見まするに後年天下を掌握するところの人相でございます、　私此の時には易學相學と言ゐるものは全く無形のものであると心得、　算儀筮竹を取つて、　大地へ投げ出しましたが、　彼の人怪現なる顔をいたして、　何故、あつて斯る擧動に及ぶと言ひますから、　斯樣々々然か〳〵と言ひますと、　彼の男大口開いて笑ひ出し、　易者能くも吾れが天下を取ると云ふ生涯の運星を見られたり、　吾れ天下を取りなば御身へ對し十萬石を授けんと言ふ、　其の器量凡人ならざる所、　宜なるかな今日と相成り僅々十年足らずに致して、　中國探題職と相成り、　當中國

表に征伐を致し、　出陣に及び向ふ所彼の人に敵對ふものは一人と致してございません、　畏れながら彼の人と槍先を爭ふは御當家の爲に、　御爲に相成らず、　宜しく御和談あつて然るべく存じ奉ります」　此處で尙も相談の結果、「如何にも安國寺惠瓊長老の一言尤もなり、　然らば長老、　御身羽柴の陣中に使者を致し、　和談を申込まれます樣」、　とありました、　之れは秀吉の運が好かつたのでございます……、　安國寺惠瓊は此處に和談のお使者に參りました、　此の時秀吉が、　秀吉「如何にも和談を承知いたした、　就ては惠瓊、　その、　和談を致したるからは秀吉、　軍をおさめて之れより上方へ引返すが、　實は六月の二日主人右大臣信長は京都に於て、　逆賊明智光秀の爲に落命を遂げた、　依て之れが吊合戰を致すが爲め京都へ立歸るが、　萬一毛利吉川、　小早川の三家に於て此の秀吉を追討たんとなれば決して苦しう無い、　此の段一

言申しいれる」安國寺惠瓊は恐れ入つて立歸り、此の秀吉が言葉を披露いたしますと、毛利吉川の兩名は、「何に秀吉は、主人信長に離れ、當方より和談を申込みしを幸ひ、當所を陣拂ひに及んで上方へ引返すとな、夫れ主なき奴原、後追駈けて追討て……」とはやり立ちますのを小早川左衛門督隆景が、隆景「アイヤ夫れは爲りません、彼の人之れを秘密にして當所を陣拂ひに及ぶ樣なれば、追討をかけたりとも勝利がありませう、併し公然名乘つて當所を引拂ふ位な人に、なまじいに追討をかけたりとも、却て不愛を取ることでありませう、而已ならず彼の人が歸國に相成り吊合戰を致して、首尾好く明智を征伐の後、改めて軍を出さるゝからは、此の度如何程和談を申し込むといへども、よも聞入れますまい、夫れよりは却て秀吉が上方に歸り吊合戰をすると云ふからには宜しく加勢の人數を出されて宜し

からう」と斯う小早川隆景が意見を致しましたから、此處に桂能登守廣治、熊谷伊豆守寳家と云ふ兩名に、一千餘人の同勢を添へて、吊合戰の御企てあるよし、御味方つかまつると云ふ、之れから秀吉は陣拂ひに及びましたが、サア道を急ぎます、當り前なれば一駄六足と言ひまして、一つの大駄に六足と言ふ、ブッ〳〵ドン〳〵ヱイ〳〵〳〵と歩いて行く、夫れがドン〳〵駈けて行くのでございます、播州姫路の城内へ御一泊に相成り、明日はいよ〳〵尼ケ崎城と云ふ、もと織田七兵衛尉信澄が居た城でございます……、さて姫路城内に於て秀吉公は明日尼ケ崎城へ入城致すに於ては、至つて一大事であるわいと思召しましたから、其の夜潛かに淺野八右衛門をお召しに相成りました、此の淺野八右衛門と云ふ人は恐ろしく秀吉公に能く似て居りますから、お小姓衆を始めと致して秀吉の家來は小猿

々と綽名をつけて本名を呼ぶものはございませんが、斯うも此の八右衛門位似た人は少いものでございます……、其の八右衛門を潜かにお呼びに相成りまして、秀吉「さて八右衛門其の方明日余になり變つて尼ヶ崎城へ參れ、就ては敵を欺くには味方を欺くが肝要なるに依り、今晩より味方のものに知れざる樣に、我が身換りと爲つて居れ、」八右「御家來多き中より此の八右衛門に、大役仰せつけ下され、有難たく奉ります」、秀吉「併し八右衛門事に依ると明日尼ヶ崎城に這入るまでに、明智の伏勢あらんも計り難ない、其の時汝は三十六計逃げるに如かず、一生懸命逃げよかし、一身さへ助かれば好いのである、併し萬一いよ〳〵逃げのびられざる時は、討死致さんければ相成らんぞ、」淺野八右衛門は涙を流し、八右「身不肖ながら此の八右衛門、上がお姿に似たる許りに、明日は吾れこそ羽柴筑前守平秀吉と名乘り、

御身換りと相成りますのは、身に取りまして此の上なき冥加、有難たう奉ります」と淺野八右衛門感し涙を溢して喜びました夫れと言ふので淺野八右衛門に、鎧兜から何にから何にまでスッカリ與へました、さうして置いて其の儘、秀吉公は、お居間を出て、穢ない具足を身に纏つて、黒田勘兵衛の陣中へまぐれ込んで了ひました、知るものは絶えてございません、知るものゝ無いのを浮れ節屋は知つて居やうと云ふ、さうすると浮れ節屋と言ふものは餘程賢いものでございますな、尤も知つて居なければ、饒舌る譯には行きませんが……、所が淺野八右衛門と云ふ人は、今まで身輕な人でございますから、加藤、脇阪、福島石田を始めと致してお小性の面々は、八右衛門が秀吉公の委に似て居る所から、秀吉公のお傍近くに召使はれて、八右衛門八右衛門と云つて君の御寵愛深いと言ふので憎みます、夫れでご